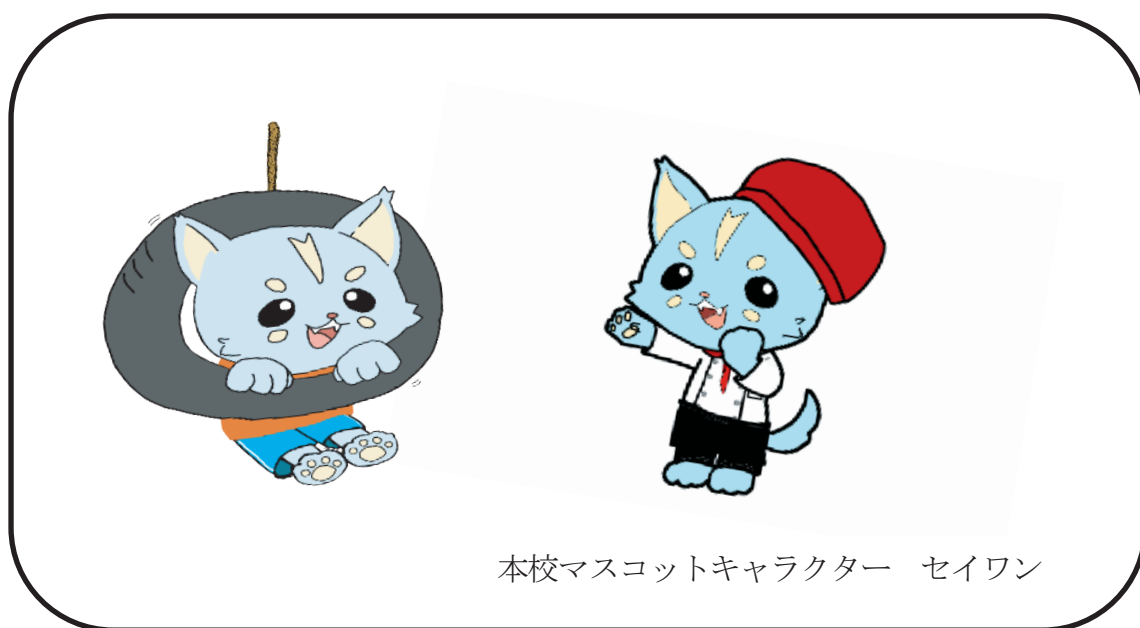


文部科学省指定
マイスター・ハイスクール
令和7年度 成果報告書

(令和5年度指定 3年次)



学校法人 一川学園



清和学園高等学校

目次

1. はじめに	1
2. マイスター・ハイスクール実施概要図	2
3. マイスター・ハイスクール実施概要図	3
4. 事業の実施期間・管理機関・指定校名・事業名・事業概要	4～5
5. 学校設定教科・科目・意思決定機関の体制・事業推進機関の体制	5～6
6. 管理機関の取組・支援実績	6～11
7. 事業の実績	11～43
①MHS 事業の地元への活動理解	12～13
②ゼロカーボンの実践取組	13
③最先端技術や知識の習得	13
④企業と連携した新商品開発	13
⑤梅・ゆずの食の高付加価値化	13～14
⑥IT を活用した成果の発信	14
8. 目標の進捗状況, 成果, 評価	43～45
9. 次年度以降の課題と改善点	45～47
10. 生徒によるルーブリック自己評価	47～50
11. その他	50～51
12. 各授業等アンケート結果について	51～71
13. 総括 (マイスター・ハイスクール CEO)	72～77

1、はじめに

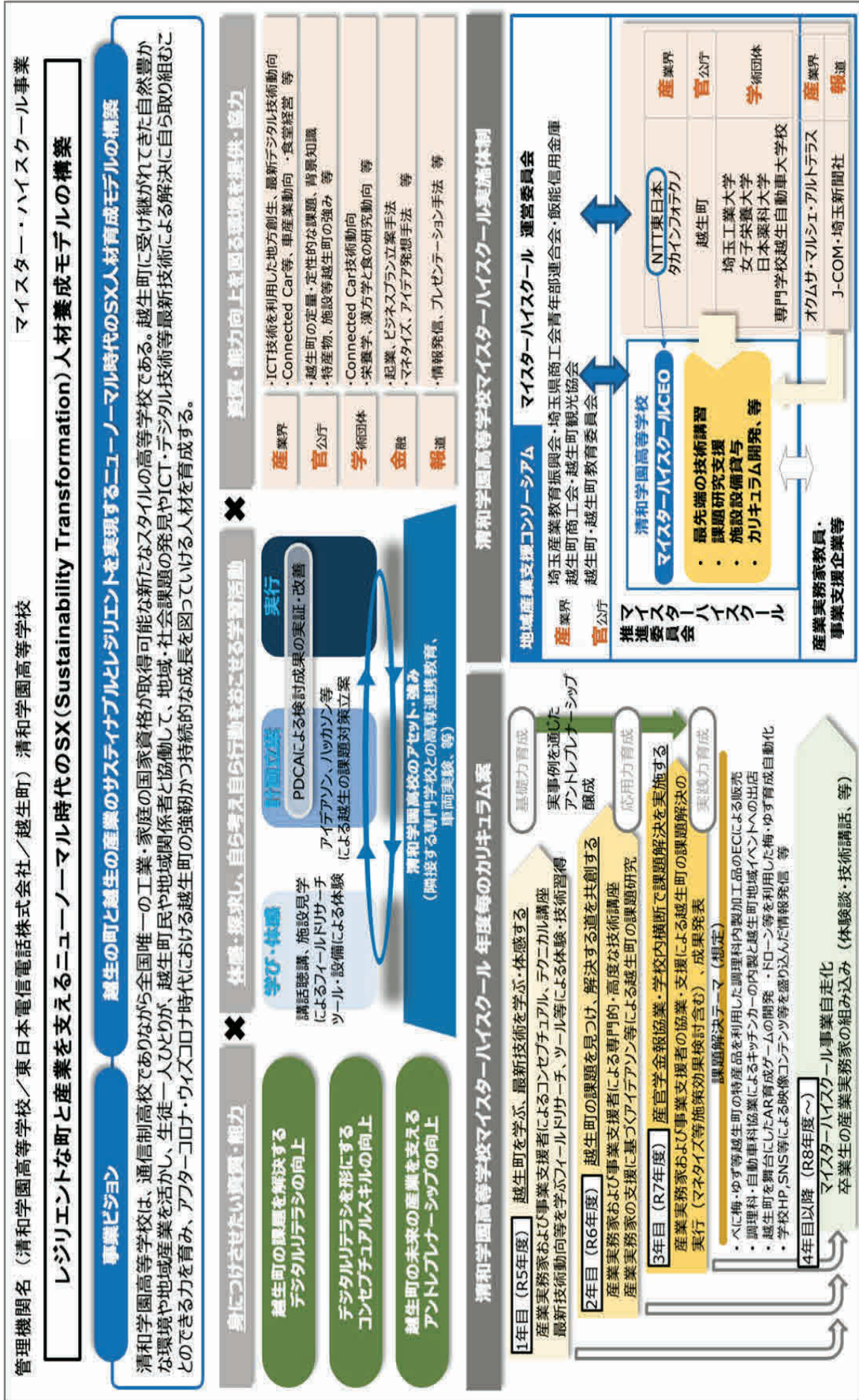
埼玉県越生町は、県のほぼ中央に位置し、人口約1万1千人を擁する自然豊かな地域である。外秩父山地と関東平野の接点に位置し、町の中央を越辺川が流れる地勢を有する。関東三大梅林の一つである越生梅林、日本観光百選の黒山三滝、五大尊つつじ公園、山吹の里歴史公園など、多様な観光資源と歴史文化資源を備えている。梅とゆずの収穫量・出荷量は県内第1位であり、県内最大の大クスの木や平安時代の仏像群など、自然・歴史の両面で高い価値を有する。平成28年には全国初の「ハイキングのまち」を宣言し、近年は健康志向の高まりとともに、首都圏からの来訪者が増加している。

この恵まれた環境の中に所在する清和学園高等学校は、昭和37年に「越生自動車学校整備科」として開学し、自動車整備士の養成を目的に設立された。平成16年には通信制高校として全国で初めて国家資格（3級自動車整備士）の取得が可能な自動車科を設置し、平成29年には調理師国家資格の取得が可能な調理科を新設した。さらに、学び直しや資格取得に対応する普通科（アドバンスコース・ベーシックコース）を含む3学科2コース制を整備し、「行うことによって学ぶ」という建学の精神を基盤とした教育を展開している。

令和5年度からはマイスター・ハイスクール事業の指定校として取り組みを開始し、本年度で3年目を迎える。地域資源を生かした学びと専門教育の充実を図りながら、生徒の技能向上と地域社会への貢献を目指して事業を推進している。



2、実施概要図



レジリエントな町と産業を支えるニューノーマル時代のSX (Sustainability Transformation) 人材養成モデルの構築

令和6年度目標：事業カリキュラムの実証、企業連携の強化、評価基準の策定

Connected Car最新技術

- 授業対象学科 ■ 自動車科
- 自動運転、の仕組み、講義、学習
 - 実証フィールドによる実験参加
- 【産実務家教員・事業支援者】
- 日産プリンス 埼玉販売(株)
 - 埼玉工業大学
 - 専門学校越生自動車大学校
 - (株)FOMM

車産業動向

- 授業対象学科 ■ 自動車科
- 最新FA技術のフィールド見学
 - 実地体験
 - 電気自動車技術動向
 - 次世代自動車整備技術動向
- 【産実務家教員・事業支援者】
- 日産プリンス 埼玉販売(株)
 - 埼玉工業大学
 - (株)FOMM
 - 専門学校越生自動車大学校

栄養学・漢方学と食の研究

- 授業対象学科 ■ 調理科
- 越生名産のべに梅・ゆずの栄養学・漢方学知見から見た講義
 - 各学術的知見に基づく新たな名産加工品の開発、成分分析
- 【産実務家教員・事業支援者】
- 女子栄養大学/香川調理製菓専門学校
 - 日本薬科大学

食堂経営

- 授業対象学科 ■ 調理科
- 生産・販売拠点道の駅を活用した食堂経営の実地体験
 - 名産加工品の企画、販売、パッケージングの実地体験
- 【産実務家教員・事業支援者】
- (株)越生特産物加工研究所
 - オクムサ・マルシェ
 - 越生町商工会・観光協会

ICTを利用した地域創生手法

- 授業対象学科 ■ 自動車科 ■ 調理科
- 実証フィールドによる実験参加 (ドローン・農業ICT・観光AR、等)
 - 地域特産とテックノロジーの掛け合わせをするアイデアの創出 (アイデアソン、等)
- 【産実務家教員・事業支援者】
- NTT東日本
 - (株)タカインフォテックノ
 - (株)アルトテラス

最新デジタル技術

- 授業対象学科 ■ 自動車科 ■ 調理科
- XR技術、ゲーミングプログラムを活用した地域の魅力発信につながる実験参加
 - NW・クラウド等の基本技術からAI活用などの講義、学習、体験
 - 動画など各種デジタルコンテンツ作成についての講義、実証
 - 各種ツールを利用したサイバーセキュリティの知識学習、体験
- 【産実務家教員・事業支援者】
- NTT東日本
 - (株)タカインフォテックノ
 - (株)アルトテラス

コンセプチュアルスキル等

- 授業対象学科 ■ 自動車科 ■ 調理科
- 越生町の資源を活用したビジネスプラン策定講義、学習
 - 策定プランについてのプレゼンテーション
 - 資金調達等のファイナンス知識の講義、学習
 - ICTを駆使したホームページ、SNS等の知識学習、体験
- 【産実務家教員・事業支援者】
- (株)タカインフォテックノ
 - 飯能信用金庫
 - J-COM・埼玉新聞社

4、事業の実施期間

令和7年4月（契約締結日）～ 8年3月31日

管理機関

①管理機関（市区町村・都道府県）

ふりがな	おごせまち
管理機関名	越生町
代表者職名	町長
代表者氏名	新井 康之

②管理機関（産業界）※2団体以上ある場合は、適宜、欄を追加して記入してください。

ふりがな	ひがしにほんでんしんでんわかぶしきがいしゃさいたまじぎょう
管理機関名	ぶさいたまにししてん 東日本電信電話株式会社埼玉事業部埼玉西支店
代表者職名	支店長
代表者氏名	山崎 大二郎

③管理機関（学校設置者）

ふりがな	がっこうほうじんいちかわがくえん
管理機関名	学校法人一川学園
代表者職名	理事長
代表者氏名	一川 高一

指定校名

学校名 清和学園高等学校

学校長名 一川 高一

事業名

「レジリエントな町と産業を支えるニューノーマル時代のSX人材養成モデルの構築」

事業概要

1. 近年、ICT（情報通信技術）やIoT（モノのインターネット）の急速な発展・普及により、産業構造は大きく変化している。本校は通信制高校でありながら、全国で唯一国家資格の取得が可能な学校であり、工業（自動車科）・家庭（調理科）を有する専門高校に匹敵する新しいスタイルの高等学校として位置づけられている。

一方、越生町は埼玉県随一「梅・ゆず」の生産地であるが、以下の課題を抱えている。

(1) 農家の高齢化と後継者不足

(2) 梅・ゆず販売単価の低下

さらに、町は豊かな自然環境を活かし「ハイキングの町」を全国で初めて宣言したものの、観光振興の成果指数は目標値に届いていない。

2. 課題への対応方針

これらの課題に対し、本事業では以下の取り組みを推進する。

(1) 観光資源の有効活用と農産物の価値向上

- (2)食品加工（2次産業）、流通・販売（3次産業）への展開
- (3)栽培から収穫、加工、流通・販売までのバリューチェーンにおける生徒の新鮮な視点を活かしたアイデア創出

3. 具体的な取り組み

- (1) 6次産業化の推進 生徒主体の活動を通じて、町の産業振興と観光発信を強化し、越生ブランド振興事業の創設や地場産業の振興、町のPRを推進する。
- (2) 新技術の活用
 - ◎Connected Car を活用したキッチンカーの運用
 - ◎環境に配慮した「CASE」最新技術の研究
- (3) 教育的効果 生徒が主体的に町の課題を発見し、解決策を共創するプロセスを通じて、学校の魅力化を図るとともに、SX人材育成モデル（Sustainability Transformation）を構築する。

4. 期待される成果

- (1) 地域産業と観光の持続可能な活性化
- (2) 産業界と地域関係者の協働による課題解決
- (3) 次世代マイスターの育成（持続可能性を担う人材の輩出）

5. 今後の展望

- (1) 地域連携の深化 地元企業・自治体・観光団体との連携をさらに強化し、産業振興と観光資源活用を一体的に推進する。
- (2) 教育モデルの拡張 本校で構築したSX人材育成モデルを他地域や他校へ展開し、全国的な教育モデルとして発信する。
- (3) 技術革新との融合 AI やデータサイエンスを活用した農業・観光のスマート化を進め、持続可能な地域経済の基盤を形成する。
- (4) ブランド価値の向上 「越生ブランド」を国内外へ発信し、農産物や観光資源の付加価値を高めることで、地域経済の安定化を図る。
- (5) 持続可能な人材循環 生徒が地域課題解決に関わることで、卒業後も地域に根差した活動を継続し、持続可能な人材循環を生み出す。

5、学校設定教科・科目の開設，教育課程の特例の活用の有無

- ・学校設定教科・科目 開設している ・ 開設していない
- ・教育課程の特例の活用 活用している ・ 活用していない

意思決定機関の体制（マイスター・ハイスクール運営委員会）

氏名	所属・職
大野 松茂	埼玉県産業教育振興会・顧問
新井 康之	越生町・町長
島野 博行	越生町観光協会・会長
長島 祥二郎	越生町商工会・会長
山本 信一	飯能信用金庫越生支店・支店長
市川 剛士	埼玉県商工会青年部連合会・元会長
一川 高一	清和学園高等学校理事長・校長

事業推進機関の体制（マイスター・ハイスクール事業推進委員会）

氏名	所属・職
村上 達則	事業推進委員長・マイスター・ハイスクール CEO
山崎 大二郎	東日本電信電話株式会社埼玉西支店・支店長
阿部 将永	株式会社タカインフォテクノ社長
関根 睦生	越生町産業観光・課長
松浦 俊太郎	越生町教育委員会学務課・課長
磯田 厚子	女子栄養大学 名誉教授
大室 智史	東京学芸大学・講師
一川 高一	清和学園高等学校・理事長・校長

6、管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
運営委員会			○									○	
事業推進委員会				○								○	
技能コンクール審査会			○										
チョコレート審査会							○						
越生町を学ぶ		○											
越生町の課題を発見する			○										
卒業作品展													○

(2) 実績の説明

①令和7年5月14日(水)

- ・「越生町を学ぶ」1学年全科で実施。

越生町の産業観光課・学務課の職員より越生町の現状と課題についての講義を受講した。

越生町が直面している人口減少や地域産業の課題、観光資源の活用状況などについて説明があり、地域の現状を多角的に学ぶ機会となった。この取り組み活動では、事業ビジョンに基づき、(1)越生町およびサステナビリティに関する理解を深める。(2)デジタルリテラシー・コンセプトチュアルスキル・アントレプレナーシップを習得する。(3)これらのスキルを活用して価値創造活動を通し

て、地域や産業の持続的成長を実現、推進する。

この講義を通して得た知見を今後の学びや実践活動に活かし、地域社会に貢献できる人材の育成を図っていく目的で毎年実施している。

②令和7年6月7日（土）

- ・第1回運営委員会開催

○令和7年度取り組み活動の方針について

○令和7年度の取り組みスケジュールについて

○事業終了後の自走に向けて

村上CEOから最終年度にあたる今年度については、昨年度の実績を踏まえて、以下を柱とする事業方針が示された。

- ・スケジュールを前倒しによる早期取り組み
 - ・継続事業の改善(内容充実・評価方法の強化)
 - ・生徒による地域課題発見学習の導入
 - ・アンケートおよびブルーブリックによる自己評価の定着
 - ・事業終了後の自走化を見据えた教員主導体制の整備
- 次年度以降に向けた体制整備と自走化に向けた意見交換
- ・外部連携体制の仕組化と教員主導化
 - ・地域連携モデル(調理科)
 - ・自動車技術教育の体系化(7年一貫教育)

委員からの意見

- ・地域イベントへの継続的な参加の重要性
- ・消費促進や飲食機会の創出を生徒の力で図る
- ・関係人口の創出を見据えた地域学習の強化
- ・助成金や協賛による活用による財源確保の重要性
- ・他校との連携による地域全体の教育価値向上に期待するなどの活発な意見交換が行われた



第1回運営委員会

③令和7年6月26日（木）

- ・第2回技能コンクール開催 事業推進委員のメンバーの皆様にも出席していただき、3年生自動車科による技能コンクールを開催。

(目的) これまでの授業で身に付けた整備技術の発表の場を設けることで、生徒たちの成長を促し、専門技術・知識の習得を図ることを目標にする。またPDCAサイクルの重要性を理解させると共に、生徒自らが主体的に考え、行動することに力点をおき実施した。併せて自車科の生徒募集にも結び付ける。

今年度は新たに埼玉トヨタ自動車株式会社様の事前授業を実施し、コンクール・整備士としての心構え等を事前授業で指導後にコンクールを実施した。

競技内容 ヴィッツを使用してジャッキアップ・ダウンからのタイヤローテーションと簡単な日常点検。この技能コンクールの内容は、中学生が参加する夏のオープンキャンパスで、生徒や保護者の前で披露した。

④令和7年7月11日（金）

- ・第1回事業推進委員会開催

今年度の取り組み方針と実施状況の報告

主な改善点

- ・ 1年次の情報科目を前期に集約（タブレット操作・Google サービス活用）
- ・ 2年次に越生町の課題発見授業の新設（文科省の提言を反映）
- ・ 授業評価の拡充（ループリック活用とアンケート回収率の向上）
- ・ 来年度以降を見据え、教師主導での運営部会連携の構築を模索中

【事業報告に対する各委員からコメント】

- ・ 自走に向けた課題はこれまでも議論が挙がっており、早急に解決するべきである。現状の体制では、不透明さが継続的な不安を生むため、明確な組織づくりを進めることが大事である。
- ・ 調理科では、原価計算や業者との交渉など、他校にない実践的な学びを生徒が経験しており、今後も継続していくことが大事だと思う。自動車科については、水素ステーション誘致や環境技術の導入など、地域課題に、結び付くような新たな学びを検討してはどうか。東京から移住し地域で成功している起業家の実践例を学習に取り入れ、生徒の探求心を刺激することも必要ではないか。
- ・ 清和学園と越生町が連携して取り組んでいる3年間は非常に価値が高く、今後もこの連携を進化させていきたい。生徒の率直な声は、行政にとっても貴重なフィードバックであり、若者の視点も政策に取り入れていく。梅サミットでは、学園の成果を町全体の取り組みとして発信する。
- ・ 特産品レシピは越生町職員にも好評であり、今後町外への後方展開に力を入れる。商工会・観光協会とも連携して、教育成果を地域の成長に結び付ける。

【自走体制案に対する各委員のコメント】

- ・ コンソーシアムの自走には、企業が参加し続けるための明確なメリット設計が不可欠である。自走を実現するためには、属人的な運営ではなく、ある程度の「型」を用意し、カリキュラムも常にアップデートしていく必要がある。村上CEOが不在となった後も体制が維持できるよう責任分担と人材の配置を早期に明確化する。
- ・ 越生町としては、学校・企業・地域団体が連携しながら町の未来を築く「共創」の体制を目指していきたい。調理科のレシピを商店や企業が商品化することで、商業と教育が相互に補完しあうモデルを構築する。今後も町や行事や観光事業に高校生が積極的に参加し、町の顔となっていけるよう支援を続ける。

⑤令和7年10月22日(水)

- ・ チョコレートプロジェクト審査会

チョコレートプロジェクトの審査会に運営委員・推進委員が審査員として参加

3年目となるチョコレートプロジェクトでは、身に付ける力として、「社会貢献力」「提案力」「実行力」の3つを掲げて取り組んだ。

⑥越生町の課題を発見する

6月17日(火) 6月24日(火) 文科省の昨年度の提言を受けて2年生全学科で実施。

第1回：越生町の4名の職員に参加していただき「越生町の問題を見つけよう」生徒は学科を横断したグループに分かれ、越生町の現状について話し合いを行った。地域の人口減少、高齢化、観光資源の活用不足、交通の不便さなど、さまざまな視点から問題を抽出し、ワークシートにまとめた。

第2回：「学科別グループで課題を検討」各学科の専門性を活かし、前回抽出された問題に対してどのような課題が考えられるかを議論した。たとえば、観光資源の活用に関しては、情報発信の不足、交通アクセスの課題、地域住民との連携不足など、複数の課題が挙げられた。各グループは検討結果を発表し、他グループとの意見交換を通じて視野を広げた。

この2回目の実施時には、文部科学省や評価委員の方々にも生徒の様子を参観していただいた。

⑦令和8年2月16日(月)

第2回事業推進委員会開催

令和7年度の成果と課題(事業統括報告)

事業統括村上CEOより、本年度の重点取組と成果が報告された。

主な改善・新規取組

技能コンクールの高度化

- ・埼玉トヨタとの連携により、企業視点(顧客満足)の導入。
- ・生徒自ら競技内容を設計し、動画で振り返りを実施。

産業環境フェアでの地域貢献

- ・ゼロカーボン推進をテーマに実験・啓発活動を実施。
- ・地域住民への説明・実践を通じ、社会と接続する学びを実現。

チョコレートプロジェクトの改善

- ・製造業者から大量生産視点の指導を受け、コスト削減。
- ・販売価格を1,200円から1,000円へ見直し、約60万円売上・約10万円利益を確保。
- ・金融機関からの借入を体験し、金融リテラシー教育を実施。

梅だれ商品開発

- ・生徒主体で改良を重ね、文化祭・梅サミットで提供。

生徒の変容

- ・学びを「使う」意識の定着
- ・試行錯誤を重ねる姿勢の向上
- ・自ら行動を起こす力の育成(文化祭署名活動等)



第2回事業推進委員会

ループリック評価では、地域理解や協働的思考は高水準。一方、アントレプレナーシップやサステナビリティの自覚には課題が見られた。

教員・学校の変化

- ・本番環境を前提とした授業設計
- ・外部連携の定着
- ・前例にとらわれない柔軟な運営体制

「成果発表という本番設定→競争→振り返り」という構造が変容を生んだとの分析が示された。

自走に向けた体制整備

事業終了後の継続に向け、以下の方針が示された。

- ・校内「マイスターハイスクール推進会議」の設置(毎週開催)
- ・運営委員会の再構築(地域・企業・若手世代を含む)
- ・企業講演会(41社)との連携強化
- ・町内3高校連携の推進
- ・道の駅を活用した実践販売機会の創出
- ・7年一貫教育構想の推進(高校～自動車大学校)

予算・人的体制の制約はあるものの、8~9割の取組継続を目指す方針が示された。

委員からの主な意見

- ・自動車科が「顧客の顔が見える学び」に進化した点を高評価。
- ・本番設定と競争の仕組みは他校・大学にも応用可能な教育モデル。
- ・SDGsは無理に当てはめるのではなく、既存取組の意味づけから始めるべき。
- ・今後の外部アドバイザー体制については、頻度・役割・企業としての関与か個人かを明確化する必要がある。

総括

3年間の取組により、生徒・教員双方に明確な変容が見られた。

今後は「仕組み化」と「外部連携の持続性」が鍵となる。

本事業で構築された実践的・地域接続型の学びを基盤に、自走フェーズへ移行していく方針が共有された。

⑧令和8年2月26日（木）

第2回運営委員会開催

1. 今年度取組報告

自動車科

- ・技能コンクール高度化（外部連携・振り返り導入）
- ・環境フェアにおけるタイヤ空気圧点検の社会実践

調理科

- ・チョコレートプロジェクトの大量製造対応・完売
- ・金融リテラシー教育の実施
- ・梅だれ開発、文化祭実施、梅サミット発表

3年間総括

- ・本番」を軸とした社会実践型 PBL の確立
- ・生徒の主体性・行動力の向上
- ・自走体制構築へ移行段階

2. 委員からの評価・意見（詳細）

（1）町長コメント

①事業開始時の判断の妥当性

- ・当初から「直感的に良い制度」と判断し、町として積極関与を決断。
- ・議会も理解を示し、結果として妥当な判断であったとの認識。

② 生徒の力の評価

- ・課題を自主的に発見し、自ら工夫・改善する力が備わっている。
- ・応用力が身につけており、社会でも十分通用する力になっている。

③ 地域への期待

- ・将来的に越生町に戻り、起業や地域活動で貢献してほしい。
- ・関係人口創出につながる人材育成として高く評価。

（2）委員（地域・産業界）コメント

① 成果の「可視化」を高評価

- ・商品・デザイン・試食など“形ある成果”が明確。
- ・梅だれや肉巻きおにぎり等、実際に試食して驚いたとの声。
- ・特産品の可能性を広げた点を評価。

② 生徒の地域愛の醸成

- ・生徒が越生町に関心を持ち、横断的に地域を見始めている。
- ・地域に気持ちが向いたことが商品開発につながった。

③ 継続への強い要望

- ・一過性にしてはならない。
- ・自走後も発展的に続けてほしい。
- ・卒業後の社会貢献・地域との接続を意識してほしい。

（3）金融機関コメント

① 3年間の位置づけ

- ・3年間は「創業期」。
- ・今後は成長期・成熟期へどう展開するかが重要。

② ノウハウ蓄積の評価

- ・地域・企業・学校のネットワークが形成されたこと自体が資産。
- ・今後は関係人口を増やし、土台を強固にしていく段階。

③ 支援継続の意思

- ・金融支援のみならず、ネットワーク活用等で協力可能。
- ・相談を積極的に受けたいとの表明。

(4) 他校連携への期待

- ・越生町内に高校3校が存在する特異性を活かすべき。
- ・県立越生高校との連携（美術・アニメ分野等）は可能性が大きい。
- ・産業祭・文化祭・ハイキングイベント等での共同展開に期待。

(5) 地域資源活用への具体的提案

- ・道の駅2階スペース活用
- ・駅前広場の活用
- ・キッチンカー展開
- ・町イベントとの連動
- ・ハイキングコース開発等

積極的に打って出る」姿勢を期待する意見あり。

3. 総括（委員評価を踏まえて）

- ・本事業は、生徒の主体性・応用力・地域理解を実践を通じて育成した点で高く評価された。
- ・教育効果のみならず、地域活性化モデルとしての価値も確認された。
- ・事業終了は終わりではなく、地域とともに発展させる新たな段階に入るとの共通認識が形成された。

⑨令和8年3月3日（火）卒業作品展

調理科では3年間の学習成果を発揮する場として、毎年卒業作品展を開催してきた。従来は保護へ松花堂弁当を提供していたが、当日のコミュニケーションが十分に取れない場面が多く改善が求められていた。この課題を踏まえ、昨年度よりマイスター・ハイスクール事業の一環として、越生町の特産品を取り入れた料理をビュッフェ形式で提供する方式へと変更した。今年度は松花堂弁当はサンプル展示とし、生徒の成長をより身近に感じてもらうとともに、保護者・生徒・越生町関係者・運営委員会・事業推進委員が自然に交流できる場の創出を目的とした。運営にあたっては、調理技術だけでなく、機材の選定、配膳方法、来場者動線的设计、盛り付けや装飾など、立食ビュッフェ特有の運営技術について実践的に学習した。来場者約80名を想定し、和・洋・中・デザート of 4班体制で実施。各班が越生町の特産品を活用した料理を1品以上取り入れ、松花堂弁当の展示とビュッフェ提供を通して、3年間で培った技能を発揮する機会となった。

7. 事業の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（令和7年4月1日 ～ 令和8年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
① MHS 事業の地元への活動の理解			→									
② ゼロカーボンの実践取組	→						→					
③最先端の技術や知識の習得	→						→					
④ 企業と連携した新商品の開発	→											
⑤梅・ゆずの食の高付加価値化	→											
⑥ITを活用した成果の発信	→											
運営委員会			○								○	
推進委員会				○							○	

① 「MHS 事業の地元への活動の理解」

(1) 行政との連携による地域理解の進化

越生町産業観光課・学務課の職員を招いた、越生町の現状や課題に関する講義。越生町の歴史や人口減少や高齢化、観光資源の活用、地域経済の活性化など、地域に直面する課題を具体的に学ぶことで、生徒たちは「地域を見る目」を養った。

(2) 地域課題をテーマにした探究

全学科の2年生を対象にした越生町を題材とした探究型学習を展開。グループごとにテーマを設定し、課題の調査・分析・解決策の提案を行った。

(3) 地域との対話と協働の機会の創出

地域イベント（河川清掃・越生祭り・おっぺ川灯籠祭り・産業祭・環境フェア・梅サミットへの参加）。また地元商店街との伝統文化の一つであるうちわ制作のコラボレーション企画実施し、MHS 事業の地元への活動理解に努めた。

生徒が、地域住民や観光客と直接交流することで、地域の魅力や課題を肌で感じると共に地域に貢献する喜びや責任感を育んだ。

(4) スキル習得と実践への応用

デジタルリテラシー(情報収集・発信)、コンセプチュアルスキル(課題発見・解決力)アントレプレナーシップ(企画・実行力)を事業やプロジェクトを通して習得できた。

全国産業教育フェア福島大会・越生町環境フェア・梅サミット等で地域課題に対するプレゼンテーションを実施し、町の関係者からフィードバックを受けることで、実社会に適用できる表現力や思考力磨いた。

② 「ゼロカーボンの実践取り組み」

これまでの2年間マイスター・ハイスクール授業を通してSX(サステナビリティ・トランスフォーメーション)に基づき地域の課題を解決する力を育てることを目的にチョコレートプロジェクトやSDGsカードゲームを使った授業も実施する中で、生徒たちが地域課題に向き合いながら、環境や社会への貢献意識を高めてきた。

今年度は、自動車科の取り組み活動として、越生町が取り組むゼロカーボン宣言に何か貢献できないかということで、CO₂削減を目指して、タイヤの空気圧に着目した取り組みを実習の時間空気圧が多い車と少ない車で空気抵抗を測定し、「全国産業教育フェア」の福島大会や「越生町環境フェア」で実際来場者のタイヤ空気圧を点検してやることでCO₂の削減につながることを生徒の目線から訴えた取り組みを実施した。

③ 「最先端の技術や知識の習得」

埼玉工業大学との高大連携授業の一環として、毎年最先端の自動運転技術を実際に体験する機会を設けている。今年度も同様に、進化を続ける自動運転技術の現状を確認することで生徒たちは将来の車社会に対する理解を深めるとともに、未来のモビリティを肌で感じる貴重な体験を得ることができた。

また、企業後援会のご協力により、日産の「プロパイロット」およびスバルの「アイサイト」といった日本が誇る先進運転支援システム(ADAS)を搭載した車両を取り扱う自動車ディーラーの方々に来校いただき、それぞれのシステムの構造や特徴についての講義と体験授業を実施することができた。生徒たちは実車を通じて技術の違いを理解し、より実践的な知識を深めることができた。来年度以降は、越生自動車大学校の企業後援会との7年一貫教育の連携のもと、各自動車ディーラーのご支援を受けながら、最先端技術や知識の習得を継続的に進めていく予定である。

④ 「企業と連携した新商品の開発」

今年度で3年目となる「清和チョコレートプロジェクト」を実施した。本取組は、地域資源の魅力発信と商品開発の実践学習を目的とし、越生町の特産品である梅・ゆず・はちみつを活用したオリジナル商品の制作に取り組んだ。制作にあたっては、山手調理製菓専門学校様の協力を得て、バレンタイン商戦に向けた商品開発と販売を行った。また、社会福祉法人かえで様との福祉連携として、昨年度に続きおごせ福祉作業所の皆さんと協働し、チョコレートの袋詰め作業を実施した。生徒にとって、福祉の現場と関わりながら地域共生の重要性を学ぶ貴重な機会となった。さらに、調理科2・3年生は地域振興の一環として、越生町のブランド梅「越生べに梅」を活用したオリジナルメニューを開発し、今年度初めて文化祭や「全国梅サミット」で販売および試食会を行った。開発メニューは、(1)特製梅だれを使用した「梅だれ付き肉巻きおにぎり」、(2)練り梅と甘露梅を使った「梅ソースのホットドッグ」の2品である。今後は、越生町のふるさと納税返礼品としての活用も視野に入れ、地域とともに育つ学びとして継続的に新商品の開発に取り組んでいきたい。

⑤ 「梅・ゆずの食の高付加価値化」

本校では、地域資源を活用した商品開発を通じて、地域活性化と教育の融合を目指す取り組みを進めている。その一環として実施している「清和チョコレートプロジェクト」では、越生町の特産品である梅やゆずを使用したチョコレートを、生徒たちが自ら企画・開発・販売している。

今年度は、初開催となった文化祭「清和祭」において、季節に合った商品の多様化を図る新たな試みが行われた。2年生調理科の生徒たちは、若者の嗜好に合わせた「梅ソースホットドッグ」や「梅だれ肉巻きおにぎり」など、従来にはなかった新たな付加価値を持つ商品を開発・提供し、来場者から好評を得た。

また、3年生にとっての集大成となる卒業作品展に向けては、梅やゆずに加え、「万能だれ」などの新たなメニューも登場し、商品の多様化と高付加価値化がさらに進展している。これらの活動を通じて、「清和ブランド」の確立を目指し、パッケージデザインや商品に込めたストーリー性の強化にも取り組んでいる。販売面では、地元の梅の駅や百貨店に加え、オンライン販売やふるさと納税返礼品としての展開も視野に入れている。

さらに、商品開発を通じて、生徒たちはマーケティング、デザイン、プレゼンテーションなどの実践的なスキルを学んでおり、他校や専門学校とのコラボレーション授業を通じて視野を広げる機会も得ている。

これら一連のプロジェクトを通じて、地域資源を活用した教育と実践の融合の可能性を実感することができた。今後も地域と連携しながら、より一層の高付加価値化と教育活動の充実を図っていきたい。

- ⑥「ITを活用した成果の発信」1年生全科の授業では「The Action!～SDGs カードゲーム～」を活用し、生徒たちが越生町の地域課題について主体的に考え、意見を出し合いながら解決策を導き出す学習を3年間継続して実施してきた。これらの活動の成果を、ICT ツールを用いてプレゼンテーション資料や動画にまとめ、地域イベントや学校説明会などの場で発表できるまでになった。

また、Connected Car 技術やビジネスプランの立案といった実践的な学習を通じて、情報発信力や表現力の向上にも取り組んでいる。生徒たちは、ICT を活用して地域の現状を可視化し、自らの考えを効果的に伝える方法を学んでいる。さらに、ICT を活用した実践授業を展開。自動車科・調理科・普通科の生徒が協力し、地域課題に対する解決策を模索する中で、IT を活用した情報収集・分析・発信のスキルを高めている。これらの活動は、地域社会とのつながりを深めるとともに、生徒たちの実践的な ICT 能力を育成し、将来の社会で求められる情報発信力の基盤づくりになっているので今後も継続していきたい。

授業/プロジェクトと能力・スキルの関係図

授業名/PJ名	自動車科			調理科			越生町理解	サステナビリティ理解	デジタルリテラシー	コンセプトスキル	アントレプレナーシップ
	1年生	2年生	3年生	1年生	2年生	3年生					
越生町を学ぶ	○			○			○	○	○	○	○
SDGs を学ぶ	○			○			○	○		○	○
ゲームクリエイターから学ぶ	○			○					○	○	○
越生町を学ぶ 成果発表会	○						○	○	○	○	○
越生町課題発見		○			○		○	○		○	○
技能コンクール			○				○	○	○	○	○
CASE+α	○	○	○					○	○	○	○
ICTによる地域課題解決	○						○	○	○	○	○
最新技術を体感 (VR)	○			○					○		○
環境とクルマ		○					○	○		○	○
最新整備技術入門		○							○		○
越生町の課題解決を 実践する			○				○	○	○	○	○
料理写真撮影				○					○	○	○
特産品授業				○	○	○	○	○			
クリスマスコンテスト				○	○				○	○	○

授業名/PJ名	自動車科			調理科			越生町理解	サステナビリティ理解	デジタルリテラシー	コンセプトスキル	アントレプレナーシップ
	1年生	2年生	3年生	1年生	2年生	3年生					
飲食店開業講座				○					○	○	○
薬膳を学ぶ				○			○				○
チョコレートPJ					○		○	○	○	○	○
特産品ランチ学内販売						○	○	○	○	○	○
学内販売から学ぶ飲食店運営						○				○	○
特産品レシピ立食ビュッフェ						○	○	○	○	○	○

■ 3年間のカリキュラム構成

本校では、実践を最終的な到達点として位置づけ、そこから逆算して学びを段階的に積み重ねるカリキュラムを構成してきた。3年間を通じて、生徒が無理なく成長し、社会で価値を生み出す力を育成できるよう体系化を試みてきた。

1年次

地域理解や ICT 基礎の習得に重点を置き、成果物の作成や発表を通して地域への理解を深めるとともに、「見られる」「伝える」といった基礎的な経験を積む段階とし、学びを社会と結びつけるための土台づくりを行う期間であるとした。

2年次

専門性を生かした小規模なプロジェクトに取り組み、方法を考え、試行し、改善する一連のプロセスを繰り返すことで、主体的な探究姿勢と実践力を育成する。自ら課題を見つけ、改善を重ねる学びが中心と実践してきた。

3年次

2年次の学びを発展させ、社会実践や競争の場に参加することで、身につけた技能や提案力を用いて価値を提供する経験を積む。実社会での成果創出を通じて、学びの集大成を図る段階であるとした。

こうした3年間の学びの実践をゴールとした逆算で、学びを段階的に配置することで、無理なく発展するよう構成してきた。

実施してみた課題もいくつかあった。逆算型で構成しているものの、3年間の学びの連続性が生徒に十分に可視化されておらず、学びの意味づけが弱くなる場面もあった。また実践をゴールとする設計である一方、実践に必要な基礎スキル（コミュニケーション、リサーチ、企画力など）の体系的な育成が十分に整理されていない面や通信制の特性上、学習時間や活動量に個人差が生じやすく、カリキュラムの進行が生徒の状況に左右される課題も残ったのでプロジェクトを自走後はきちんと年間計画に落とし込んでいくことの必要も認識することができた。

カリキュラム構成の構成ポイントとしては、本校では、育成したい人材像を起点に必要な能力・スキルを明確化し、それらを授業および各種プロジェクトに体系的に紐づける形でカリキュラムを設計してきた。

まず、既存の学校施策を基盤としつつ、マイスター・ハイスクールの視点を取り入れて再構成を行った。これにより、従来の取り組みを活かしながらも、実践性や専門性を高めた学習体系へと発展させる取り組みを行ってきた。

また、授業やプロジェクトを年間を通じた行事として位置づけることで、生徒が継続的に取り組める環境を整え、学びの定着を図ってきた。単発的な活動ではなく、計画的かつ反復的に学習機会を設けることで、少しずつ能力育成の深化につながってきている。さらに、入学直後の段階でデジタルリテラシー育成を集中的に実施し、その後の学びの基盤として活用できるようにした。早期に必要なスキルを身につけることで、以降の授業やプロジェクトにおける主体的な学習を支えている。通信制の特性を活かし、時間割を柔軟に組み替えることで実践的な学習時間を確保することができた。生徒の状況やプロジェクトの進行に応じて学習時間を調整できる点は、実践重視のカリキュラムにおいて大きな強みとなっている。

こうしてCEOが主導となって取り組んできた活動を通して、育成したい人材像に沿った能力・スキルの体系的な育成が可能となり、学校全体としてある程度一貫性のあるカリキュラム運営が進んできた。一方今後自走に向けては、生徒・教員双方が「どの学びがどの能力につながるのか」を理解できるよう、学習到達目標を明確に提示することや行事としての枠組みを維持しつつ、毎年テーマや形式を見直し、マンネリ化を防ぐことを視野に生徒の提案を取り入れ、柔軟に内容を更新する仕組みを構築していく。入学直後のICT教育に加え、2・3年次にも段階的なスキルアップ機会を設け実施していく。

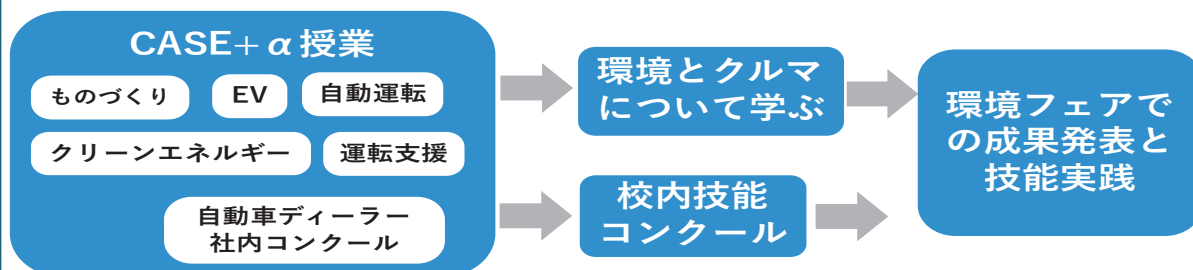
■令和7年度マイスター・ハイスクール全体カリキュラム

1年次は学科共通で「越生町」を学び、成果物の作成・発表を行うことにより学びを深める。自動車科は「CASE+α」の学びからヒントを得て、地域課題であるゼロカーボン活動を実施。調理科は「特産品」を使ったレシピ・商品開発を通して地域課題の解決に取り組む。



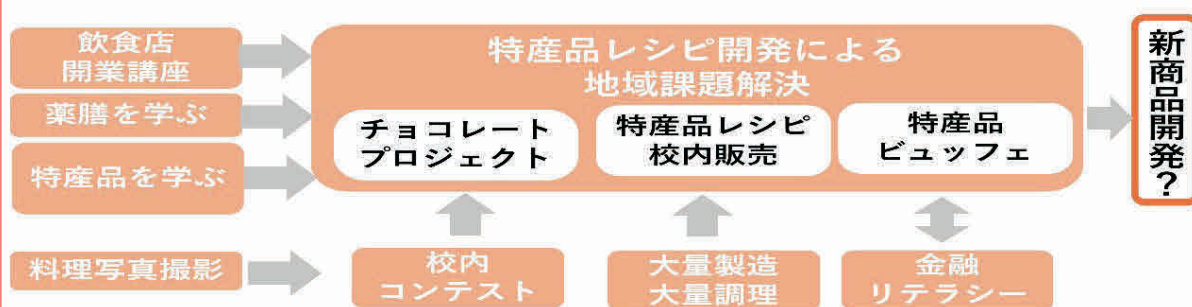
自動車科

CASEからの学びによる 地域課題解決



調理科

特産品レシピ・商品開発 による地域課題解決



■学科共通的な取り組み活動

5月14日（水）【授業名・プロジェクト名】 「越生町を学ぶ」（概論）

1年生全学科「LHR・総合的な探究の時間で実施」

【授業の概要】

- ・越生町外から通学する生徒が多いことから、越生町への理解を深める狙いで実施。
- ・越生町職員から越生町の歴史や文化、産業を含めた課題や問題点の話を聞き、生徒が調べ学習を通して越生町を学び、その結果をまとめて文化祭に発表会を実施した。
- ・発表は学科毎に自動車科・自動車クイズゲーム、調理科・ポスター制作、普通科・越生町の自然について、生徒・保護者の前での発表会を実施。
- ・町を知らない人に越生町を知ってもらうことを目的とした内容とする。
- ・クイズゲームは越生町に関するクイズを考えてICT基礎で実施するクイズゲームを応用して制作。
- ・ポスターは越生町の特産品について学び、その特産品・製品の販売促進のためのポスターを制作。

【成果と課題】

- ・授業後のアンケートでは、越生町の活動やPRに対して好意的な意見が多く寄せられ、特に正月の七福神巡りや動画によるPR活動が高く評価された。また、生徒や教職員の実際の参加も見られ、地域とのつながりを実感する機会となった。

一方課題として

- ・本校には地元以外から通学している生徒が多いため、越生町に関する知識や関心に個人差があり、地域の特色や文化を十分に理解するまでに時間を要する様子も見受けられた。今後は、事前学習の充実や地域住民との交流の機会を増やすことで、より深い地域理解と主体的な関わりを促す工夫が必要になってくる。



越生町職員による講和

【能力・スキル】 **越生町理解** 【連携企業】 越生町

6月11日（水）【授業名・プロジェクト名】 「ゲームからSDGsを学ぶ」
1年生全学科「LHR・総合的な探究の時間で実施」

【授業の概要】

- ・SX人材育成の基礎として1年生全学科の参加を通じてサステナビリティの理解を深めると共に、学科間の交流を促進することを目的に3年目の実施となる。
- ・授業では「The Action!～SDGsカードゲーム～」(プロジェクトデザイン社)を活用して、学科混成のチームで活動を展開する。生徒たちはゲームを通じてSDGsの達成に向けた行動を考え、日常生活や学校生活で実践可能なアイデアを模索させる。
さらに、越生町の地域課題をテーマに、グループで解決策を考案し、発表を行うことで課題解決力を養う。

【成果と課題】

- ・生徒たちは、環境保護や資源の節約、地域課題の解決に向けた具体的なアイデアを数多く提案することができた。特に越生町における人口減少や観光促進のアイデアでは、テーマパークやSNS活用といった斬新な意見も挙がった。
 - ・授業を通じてSDGsの意義を理解するとともに、他学科生徒との協力の重要性を実感する場となった。
- 一方課題として
- ・他学科の生徒と協力する中で、コミュニケーションの取り方や役割分担に戸惑う場面も見受けられ、学科間の連携をより円滑に進めるための工夫や、協働のスキルを高める取り組みの必要性が課題でもある。



SDGs カードゲームの様子

【能力・スキル】

越生町理解・サステナビリティ理解・コンセプチュアルスキル・アントレプレナーシップ

【連携企業】NTT 東日本 テルウェル東日本

6月17日(火) 6月24日(火) 【授業名・プロジェクト名】「越生町の課題を発見する」
2年生全学科で2回実施「LHRの時間で実施」

【授業の概要】

授業では、「問題」と「課題」の違いを理解し、越生町の現状やデータをもとに、地域が目指すべき姿と現状とのギャップを把握することを目的として実施した。

また、自身の専門分野(学科)からアプローチ可能な課題を見出し、同一の問題に対して複数の課題が存在することを理解する力を養うことを目指した。

第1回目は、「越生町の問題を見つけよう」生徒は学科を横断したグループに分かれ、越生町の現状について話し合いを行った。地域の人口減少、高齢化、観光資源の活用不足、交通の不便さなど、さまざまな視点から問題を抽出し、ワークシートにまとめた。

第2回目は「学科別グループで課題を検討」各学科の専門性を活かし、前回抽出された問題に対してどのような課題が考えられるかを議論した。たとえば、観光資源の活用に関しては、情報発信の不足、交通アクセスの課題、地域住民との連携不足など、複数の課題が挙げられた。

各グループは検討結果を発表し、他グループとの意見交換を通じて視野を広げた。

【成果と課題】

- ・生徒は「問題」と「課題」の違いを具体的な地域事例を通じて理解することができた。
- ・越生町の現状を多角的に捉え、人口動態、観光、交通、地域資源など多様な観点から問題を抽出できた。
- ・学科ごとの専門性を活かした課題設定がなされ、実践的な視点でのアプローチが見られた。
- ・同一の問題に対して異なる課題が存在することを体感し、課題設定の多様性を学ぶ機会となった。一方課題として、
- ・第1回目のグループワークにおいて、地域データの理解が不十分な生徒もおり、議論が表面的になったグループも見受けられた。
- ・学科別グループでの課題検討において、専門性を活かす視点が十分に発揮されなかったケースもあり、事前の準備や情報提供の工夫が必要と感じられた。
- ・地域の現場との接点がなかったため、実感を伴った課題設定に至らなかった生徒もいた。今後はフィールドワークや地域関係者との交流の機会を設けることも必要である。



越生町の課題ワークショップ

【能力・スキル】

越生町理解 サステナビリティ理解・コンセプチュアルスキル・アントレプレナーシップ
【連携企業】越生町・

【授業名・プロジェクト名】 7月4日～7月17日「ゲームクリエイターから学ぶ」

1年生自動車科・調理科 「両科共「情報Ⅰ」の時間で実施

【授業の概要】

産業実務家教員である岸先生を講師に迎え、ICT教育の一環として実施。ゲームクリエイターとしての実務経験を持つ岸先生が、実際のゲーム制作現場で使用されている開発環境を紹介しながら、ゲーム開発の魅力と難しさを伝えた。授業では、岸先生が用意したミニゲームを活用し、プログラミングの基礎を学習。さらに、各学科に関連した具体例をもとに、フローチャートやアクティビティの考え方を学ぶワークを実施した。

2時限目には、2種類のゲームから1つを班ごとに選び、バグを見つけ出す「バグ探し大会」を実施。実践的な問題解決能力の育成を図った。また、学科別の応用活動として以下を実施した。

- ・自動車科：越生町を学ぶ成果発表会に向けて、「自動車科越生町クイズ」に挑戦。生徒と参加者が越生町についての理解を深めることを目的とした。
- ・調理科：昨年度の調理フローを活用し、各班で具体的なメニューを決定。調理メニューの問題点と改善点を話し合い、実用的な料理となるよう試みた。

【成果と課題】

- ・生徒たちはゲーム開発のプロセスを体験し、プログラミングの基礎的な考え方を理解することができた。
 - ・学科ごとの応用活動により、専門分野とICTの融合を体感する機会となった。
 - ・バグ探し大会を通じて、論理的思考力やチームワークの重要性を学ぶことができた。
- 一方課題として
- ・時間配分の難しさ 2時限という限られた時間内で、導入から実践、発表までを行うには時間が不足していた。特にバグ探しや調理メニューの改善案の検討には、もう少し時間が必要であった。
 - ・学習内容の定着度に差がある プログラミングの経験がない生徒にとっては、ゲーム開発の内容がやや難解であった。基礎的な知識の事前学習や、フォローアップの時間が必要と感じられた。



ICT プログラム講義

【能力・スキル】 デジタルリテラシー・コンセプチュアルスキル・アントレプレナーシップ

【連携企業】株式会社アルトテラス

11月13日(木) 【授業名・プロジェクト名】 「越生町を学ぶ成果発表会」

1年自動車科・調理科・普通科 文化祭の中で発表

【授業の概要】

本校で初めて開催された文化祭に合わせて、「越生町を学ぶ成果発表会」を実施した。各学科の特色を活かしながら、越生町の魅力を発信することを目的とした取り組みでもある。

- ・自動車科では、生徒がプログラムした自動車が越生町を模したコースを走行し、途中で出題されるクイズに正解・不正解で反応するゲームを制作。他学科の生徒や保護者も体験できる形式とし、自動車の効果音には生徒自身の声を取り入れるなど、創意工夫が随所に見られた内容となった。

- 調理科では、越生町の特産品である梅とゆずを使った実在の商品を題材に、ポスターを Canva で制作。来場者による投票を実施し、上位に選ばれた作品は「うめその梅の駅」にて梅まつりの時期に展示。
- 普通科では、越生町の自然や歴史について調査し、Canva を用いて資料を作成。来場者の前で発表を行い、普段は人前で話すことが苦手な生徒たちが堂々と発表する姿に、保護者からも感動の声が寄せられた。

【成果と課題】

- 各学科の専門性を活かした発表により、生徒たちが主体的に地域について学び、表現する力を育むことができた。
- 来場者との交流を通じて、実社会に向けた発信力やプレゼンテーション力の向上が見られた。
- 普通科の生徒にとっては、人前での発表に挑戦する貴重な機会となり、大きな自信に繋がった。
- 調理科のポスター展示が地域イベントと連携することで、地域とのつながりを実感できる取り組みとなった。

一方課題として

- 準備期間が短く文化祭との同時開催であったため、準備に十分な時間が確保できず、制作物の完成度や発表練習に課題が残った。
- ICT ツールの操作習熟度と Canva の使用において、生徒間で操作スキルに差があり、サポートが必要な場面もあった。今後は事前の ICT スキル習得の機会をもう少し多く設ける必要がある。
- 発表スペースや時間の制約もあり、発表の時間やスペースが限られていたため、十分に発表を見てもらえなかった班もあった。



1 年生普通科生徒の越生町の自然についての発表



越生マスコット梅りんと記念撮影



梅だれ付き
肉巻きおにぎり



生徒の署名活動で実現した
本校初の文化祭でも試作を重ねた
「梅だれ」レシピを提供
ホットドッグ梅ソース

【能力・スキル】 越生町理解・サステナビリティ理解

デジタルリテラシー・コンセプチュアルスキル・アントレプレナーシップ

【連携企業】越生町

【授業名・プロジェクト名】「VR 入門」

1 年自動車科・調理科・普通科 1 2 月 3 日～5 日「科学と人間生活」で実施

【授業の概要】

- ・全学科合同でVRの基本知識を学び、1時限目はゴーグルの装着方法やデモンストレーションの操作方法についての指導を受けた。2・3時限目には、今年度新たに導入された「分子パズル」「立体標本」「魔法の部屋」などの体験コンテンツを、4グループに分かれて実施した。昨年度はリモコン操作による体験が中心であったが、今年度はゴーグルに投影された物体を実際「つかむ」動作が可能となるなど、VR技術の進化を実感できる体験となった。

【成果と課題】

- ・授業後のアンケートでは、多くの生徒がVR技術の仕組みを推測しながら体験することで、技術への理解を深めることができたと回答しており、学びの定着がうかがえた。また、自動車科・調理科普通科それぞれの専門分野において、VR技術がどのように応用できるかを考える機会ともなり、将来の学びや職業への関心を高める貴重な体験となった。

一方課題として

- ・VRの体験が初めての生徒も多く、操作に戸惑う様子や、体験内容の理解に個人差があったことから、事前の導入指導や体験後の振り返り活動をさらに充実させる必要がある。



VR 体験授業

【能力・スキル】 デジタルリテラシー 【関連企業】 ベクターデザイン

■自動車科での新たな取り組み

昨年度初めて実施した技能コンクールを埼玉トヨタ自動車株式会社様との連携プロジェクトに発展させ展開した。お客様サービス向上など企業内コンクールの意義を学び、取り組みへの意識を高めた。競技内容を生徒主体で決定させ、PDCAの中に動画による振り返りを追加した取り組みとして実施した。

5月15日(木) 【授業名・プロジェクト名】 技能コンクール事前授業
3年自動車科 「自動車実習」で実施

【授業概要】

- ・埼玉トヨタ自動車株式会社様との外部連携プロジェクトとして展開する。
- ・整備技能とチームワークの向上を目的に技能コンクールを実施。事前には整備士経験のある外部講師を招き、整備士の心構えや4S安全管理の重要性について学ぶ。
- ・生徒は競技内容を自ら検討し、作業の手順や役割分担を工夫しながら練習を重ねた。練習風景は動画で記録し、映像をもとにチームごとに振り返りを行い、改善点を話し合う中でPDCAサイクルを実践させる。
- ・本番では、安全性や作業の正確さ、声かけや連携を意識しながら、限られた時間内で真剣に課題に取り組む姿を身に付けさせる。実践を通して主体性や協働性を育ませる。

【成果と課題】

- ・ディーラー社員の授業で「お客様」を意識する視点を学び、生徒はサービス全体の質を意識して技能コンクールに臨めるようになった。
 - ・映像を使った振り返りで課題に気づき、PDCAサイクルを回して改善。チームで話し合い、他班の工夫も取り入れながら切磋琢磨する姿勢が育った。お客様目線の声かけや説明など、実践を通して総合的なサービス力を高めることができた。
- 一方課題として
- ・改善のサイクルを検討する中で、振り返りの質や具体的な改善策の立案において、生徒間の情報共有

が徹底されていない場面もみられた。



各班的現状でやる項目

項目	1班	2班	3班	4班	5班
ローテーション	○		○	○	○
ヘッド脱着	○		○		
日常点検	○			○	○
24月点検		○			
タイヤの点検			○	○	○
17人組の点検				○	○
記録簿の記入	○	○	○	○	○

埼玉トヨタ自動車株式会社様の事前授業では
コンクールの意義や整備士の心構えなどを学ぶ

競技の実施内容は生徒自身が考え、
何度か試行して決定

【能力・スキル】 **デジタルリテラシー**・**コンセプチュアルスキル**・**アントレプレナーシップ**
【連携企業】 埼玉トヨタ自動車株式会社

6月26日（木）【授業名・プロジェクト名】「技能コンクール」

3年自動車科 「自動車実習」で実施 2年目

【授業概要】

- ・ 2年目となる今年度はタイヤローテーションと日常点検を入れた作業を4人1チームで実施。事前に埼玉トヨタ自動車株式会社様からコンクールや整備士としての心構え等の事前授業後のコンクールとなった。実践的な整備技術の習得とチームワークの向上を目指す。事前練習では作業の様子を動画撮影し、全員で視聴しながら良い点や改善点をディスカッションし、PDCAサイクルを実践させる。
- ・ 最終的には来賓や保護者を招待したコンクール形式で成果を発表の場を設定し、教員による採点に基づき、上位3チームを選出・表彰する。
- ・ 作業の技能向上に加え、チーム内の協力意識や改善への取り組みが強化されるようなコンクールを目指す。生徒の技術力や課題解決能力、発表力を総合的に育てる。

【成果と課題】

- ・ 生徒は声出しや分かりやすい説明でコミュニケーション力を向上させ、チームワークを強化することができた。また、効率的な作業や安全確認を意識し、責任感を持って役割を果たすことで、課題解決力や協働力を養うことができた。
- ・ 協議内容を生徒が主体的に決定することができ、PDCAサイクルを基に動画による振り返りができるようになった。

一方課題として

- ・ 動画を使った振り返りは有効であったが、ディスカッションの質や具体性には、ややばらつきも見られた。



来賓・保護者に加えて後輩や隣接する専門学校生、100名超に囲まれてコンクール本番を実施

【能力・スキル】 **デジタルリテラシー**・**コンセプチュアルスキル**・**アントレプレナーシップ**

【連携企業】 埼玉トヨタ自動車株式会社・専門学校越生自動車大学校

【授業名・プロジェクト名】 「越生町の課題解決を实践する」

◆自動車科地域課題解決ゼロカーボンの取り組み 3年自動車科 自動車実習で実施

CASEの学びを越生町のゼロカーボン活動と結びつけ、越生環境フェアでの成果発表と技能実践による貢献活動への参加として取り組む。

【授業概要】

最初に生成AIを活用して生徒同士でアイデアを出し合い、環境負荷の低減に向けた具体的なテーマとして「タイヤの空気圧と燃費の関係」に着目させる。実際の車両を用いて、空気圧の違いによる燃費への影響を体感するために、車両を手で実際に押す実験を行い、得られたデータを整理分析した。

その成果は、越生町で開催された環境フェアにて代表の生徒が展示発表を行い、来場者に対してタイヤ空気圧の重要性を説明するとともに、実際に来場者の車両の空気圧調整を行う技術実践を通じて、地域への貢献活動の一躍を担う。

越生「環境フェア」に参加した生徒たちは自動車技術と環境問題のつながりを実感し、地域社会における自らの役割と責任について深く考える機会となった。

【成果と課題】

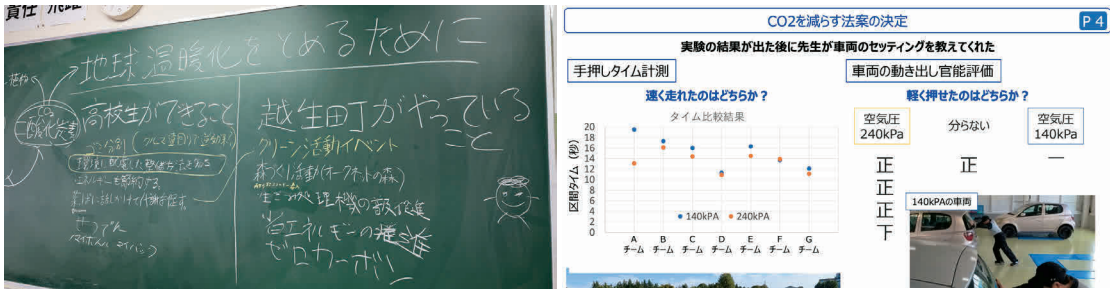
- ・教室で学んだCASEの概念を、地域のゼロカーボン活動と結びつけることで、学びを現実社会に活かす経験ができた。
- ・生成AIを活用してアイデアを出し合うことで、生徒の発想力や課題解決力が高まり、主体的な学びが促進された。
- ・実車を使用した実験や空気圧調整の実践を通じて、技能の向上とともに、地域住民への具体的な貢献が実現できた。

一方課題として、

- ・会場内での空気圧調整を行う際、実際の駐車場まで来場者を誘導する必要があり、その移動に時間がかかることや、スムーズな案内が難しい場面が見受けられた点が挙げられる。今後は、会場レイアウトの工夫や案内体制の強化など、運営面での改善が求められる。

【参加された生徒の感想】

- ・空気圧調整を行い、仕組みとゼロカーボンの関係を説明し、伝わった手応えを感じた。
- ・緊張しながらも来場者に分かりやすく説明。風対策や椅子不足など運営面の課題を感じた。
- ・来場者はゼロカーボンへの関心が高く、特に高齢者の興味に驚いた。もっと多くの人に伝えたいと感じた。
- ・来場者を増やす工夫の必要性を感じた。EV普及には価格や充電環境に課題があると思った。
- ・さまざまな年代の来場者から意見を聞き、有益な学びを得た。次に生かしたいと感じた。
- ・同時開催の(産業祭で)梅・ゆずの加工品を見て地域資源の活用を理解。農家の話から地域産業への思いを感じた。



タイヤの空気圧と燃費の関係を体感



来場者の空気圧を調整

【能力・スキル】

越生町理解・サステナビリティ理解・コンセプチュアルスキル・アントレプレナーシップ

【連携企業】なし

■普通科での新たな取り組み

美術「デザイン」の授業において、普通科が今年度初めて越生町に古くから伝わる伝統工芸品「越生うちわ」の製作に取り組んだ。この授業では、生徒が自らの視点で学校や越生町の魅力をデザインに落とし込み、うちわ職人の指導のもとで実際に製作を行った。

6月20日（金）【授業名・プロジェクト名】 「越生うちわ作り」
3年普通科 美術 「デザイン」で実施

【授業概要】

デザインの授業において、越生町の伝統工芸品「越生うちわ」の製作体験を通じた地域学習を実施。事前に越生うちわの歴史や製作工程を紹介する動画を視聴し、基礎知識を習得。その後、「うちわ工房しまの」様より職人を講師として招き、出張授業にて本格的なうちわ作りを体験させる。生徒たちは、竹骨の構造や和紙の貼り方、柿渋を使った仕上げなど、伝統技法を学びながら実際にうちわ制作を体験。デザイン部分は授業内で制作し、越生町や学校の魅力を表現する図案を考案。越生の自然や文化をモチーフとしたオリジナルうちわを完成させる。デザインと伝統技術、地域理解を融合させた本授業では、創造性と郷土愛の育成を目的とした実践的な学びの場とする。

【成果と課題】

- ・生徒たちは、越生町や学校の魅力をうちのデザインに込めることで、地域への関心と愛着を高めることができた。また、事前の動画学習や職人による指導を通じて、伝統技術への理解が深まり、ものづくりに対する敬意や文化継承の重要性にも気づく貴重な機会となった。
一方課題として、
- ・限られた制作時間の中でデザインを完成させることに苦勞する生徒も多く、時間配分や作業工程の見通しに課題が見られた。また、地域の魅力をどのように表現するかについて悩む場面もあり、より深い地域理解を促すための事前調査や情報共有の工夫が来年度以降必要になる。



越生うちわ制作

出張授業で越生うちわ作り 清和学園高校

通信制高校の清和学園高校（越生町）は20日、地元の「うちわ工房しまの」の5代目店主島野博行さんを招き、越生うちわ作りの授業を行った。

授業は、専門学校と産業界が地域産業の持続可能な人材育成システムを構築する「マイスター・ハイスクール」（文部科学省）の一環。授業に出席した普通科アドバンスコース3年生の39人は、事前に自身で清和学園

または越生町をテーマにデザインをした用紙を使用してうちわを完成させた。

丈夫なつくりが特徴の越生うちわは、明治初期に年間42万本が生産されていたとするものの、現在生産をしているのは同工房のみ。「この授業を受けて初めて越生うちわというものを知った」と同校3年生の田中未来さん。うちわ工房しまのの島野さんは「図柄が新鮮で、指導



「うちわ工房 しまの」の島野博行さん（左）から指導を受ける生徒たち。20日、越生町上野東1丁目の清和学園高校

をしていて楽しい」と声を弾ませていた。（勇有花子）

埼玉新聞社 2025/6/25 掲載

【能力・スキル】越生町理解・デジタルリテラシー・アントレプレナーシップ
【連携企業】越生町「うちわ工房しまの」

■自動車科

7月3日（木）【授業名・プロジェクト名】「CASE+α「自動車産業とトヨタ MIRAI で学ぶ FCEV」2年自動車科「自動車実習で実施」

【授業の概要・狙い】

授業では、CASEの「E（電動化）」の視点からFCEV（燃料電池車）について学び、トヨタの水素自動車「MIRAI」を題材にゼロカーボン社会実現に向けた取り組みを理解することを目的として実施した。

座学では、自動車産業の歴史や関連企業の広がり、CASEの概念、さらにトヨタのモータースポーツ活動やWOVEN CITYの概要について学習し、次世代モビリティ社会の全体像をつかませる。

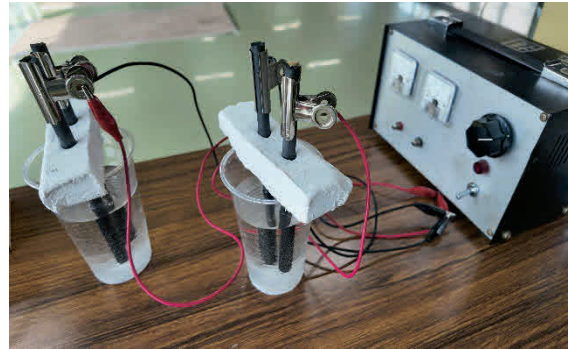
実習では、FCEVの仕組みや特徴、メリット・デメリットを小規模な燃料電池実験を通して体験的に学ばせる。また、実車「MIRAI」を用いた構造説明や水排出デモを行い、生徒が環境問題と自動車技術を結び付けて考えるきっかけを提供する。

【成果と課題】

- ・生徒アンケートでは、「廃棄物が水だけであること」「空気を浄化して排出する性能」など、これまで知らなかった環境性能に関する新たな知見を得たという声が多く寄せられ、ゼロカーボン技術への関心が高まったことが確認できた。
- ・MIRAIの実車見学を通して先進技術やデザインに触れたことで、EVやFCEVといった次世代自動車への興味が広がり、将来の自動車産業に対する期待や環境問題への意識向上が見られた。
一方課題として、
- ・授業の振り返りからは、燃料電池の仕組みや水素社会の課題など、より専門的な内容については理解ができたという生徒の声もあり、今後は基礎知識の補強や体験的な学習機会の拡充が必要である。



MIRAI の実車点検



水素で車が動く仕組みの簡易実験

【能力・スキル】

サステナビリティ理解・デジタルリテラシー・コンセプチュアルスキル
アントレプレナーシップ

【連携企業】 埼玉トヨタ自動車販売株式会社

7月16日(水) 【授業名・プロジェクト名】CASE+α「自動運転バス創る未来/クリーンエネルギーを学ぶ」

2年自動車科・2年普通科1「自動車概論・自動車構造・総合的な探究の時間で実施」

【授業概要】

- ・本授業では、埼玉工業大学のキャンパスを訪問し、「自動運転技術」と「クリーンエネルギー」をテーマに、座学および体験型の学習を実施した。
自動運転技術に関する講義では、「自動運転バスが創る未来」を題材に、技術の概要や車両構造、導入の社会的背景について学ぶ。さらに、実際に自動運転バスに試乗することで、その性能や安全性を体感し、理論と実践を結びつけた学びを深める。
- ・クリーンエネルギーの分野では、燃料電池の仕組みやその必要性について座学で理解を深めた後、燃料電池を用いた実験を通じて、エネルギー変換の原理を理解させる。

【成果と課題】

- ・授業後に実施されたアンケートでは、越生町の地域交通への応用可能性や、今後の技術進化による社会への影響について、生徒一人ひとりが未来の社会に対する意識を高めることができた。
 - ・生徒は最先端技術に触れるとともに、地域社会との関わりや持続可能な未来への視点を育む貴重な学びを得ることができた。
 - ・課題としては専門的な内容に対する理解には個人差が見られ、特に技術的な用語や仕組みに関しては、事前知識の有無が理解度に影響していたことが課題として分かった。
- 一方課題として
- ・最先端技術に関する内容は高度であり、特に技術的な用語や仕組みの理解には個人差が大きく、事前知識の有無が学びの深さに影響した。
 - ・技術の背景や基本的な仕組みについての予備知識が不足していた生徒は、当日の体験や説明を十分に活かしきれなかった。
 - ・体験後のアンケートでは意識の高まりが見られた一方で、それを具体的な提案や意見としてまとめる力にはばらつきがあった。
 - ・越生町の地域交通への応用を考える際、技術の特性と地域の実情を結びつける視点を持つことが難しいと感じた生徒もいた。



自動運転バス乗車体験



クリーンエネルギーについての講義

【能力・スキル】

サステナビリティ理解・デジタルリテラシー・コンセプチュアルスキル
アントレプレナーシップ

【連携企業】 埼玉工業大学

11月6日（木）【授業名・プロジェクト名】CASE+α 日産プリンス埼玉特別授業
3年生自動車科「自動車整備・エンジン構造・自動車工学で実施」

【授業概要】

授業ではCASEの(A)自動運転にあたるプロパイロットの技術と「E」にあたる電動化にあたるe-POWERについて学ぶことを目的に実施。

授業は、座学と体験を組み合わせた形式で実施した。ゼロミッションへの取り組みや電気自動車の(EV)の仕組み・メリット・デメリット、バッテリー開発などの電動化技術に加え、自動運転・運転支援技術(プロパイロット)の基本原理や応用について学ぶ。プロパイロットパーキングとリモートパーキングの体験を通して、技術の実用性を理解させる。

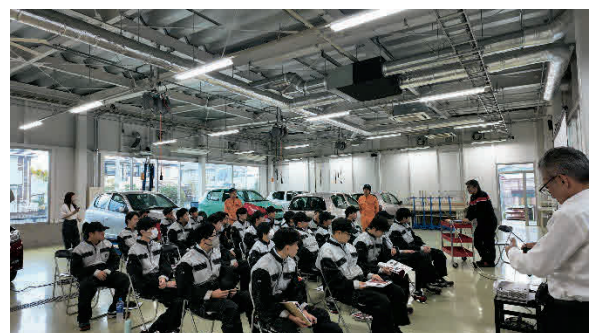
授業後には理解度テストとアンケートを実施し、生徒の知識定着や感想を本年度も収集する。

【成果と課題】

- ・プロパイロットやe-POWERといった最新の自動車技術について、仕組みや特徴をしっかりと学び、技術の意義を理解できた。
- ・実際の技術に触れることで、生徒たちの関心が高まり、未来のモビリティ社会や環境問題への意識も広がった。
- ・理解度テストで多くの生徒が正解したことから、学習内容がしっかりと身につけていたことがうかがえる。

一方課題として

- ・知識としての理解は深まったが、それを実社会や地域課題とどう結びつけるかまでは踏み込めなかった生徒もいた。
- ・プロパイロットやe-POWERの利点に注目が集まりすぎて、他の技術との比較や課題(コスト、普及率、環境負荷など)への視点が弱かった。
- ・得た知識をもとに、自分なりの意見や提案を発信する機会が少なく、学びを深めるためのアウトプット活動がもっとあると良かった。



【能力・スキル】

サステナビリティ理解・デジタルリテラシー・アントレプレナーシップ

日産GT-R車体説明と講義

【連携企業】日産プリンス埼玉販売株式会社

11月19日（水）【授業名・プロジェクト名】CASE+α「スバル自動車アイサイトを学ぶ」
1年自動車科「自動車実習で実施」

【授業概要】

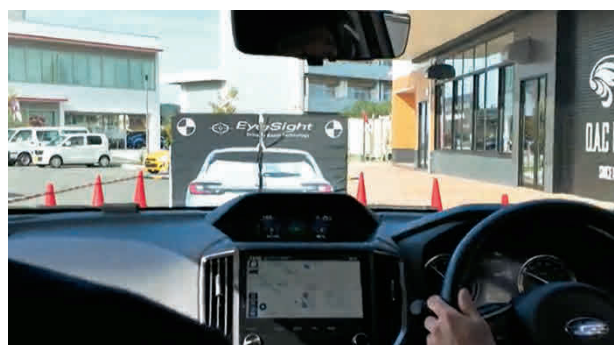
- ・埼玉スバル株式会社様による運転支援技術「アイサイト」を中心にCASEのA（運転自動化）について学び内容を理解させる。
- ・座学では、スバルの歴史や独自技術の背景を学ぶ「スバルのDNA講座」と、アイサイトの仕組みや技術解説を実施する。さらに、実車を用いてセンサーの働きや衝突防止機能の体験授業を行い、生徒には技術の実践的理解を深めさせる。アンケートでは、スバルの歴史や技術、安全性を重視する姿勢など、試乗体験を通じて運転支援技術の有効性を実感させる。

【成果と課題】

- ・生徒たちは、アイサイトの機能や仕組みに関する知識を深め、安全性と快適性を追求する技術の重要性を理解できた。また、実車体験では安全支援技術が運転に与える効果を実感でき最新技術の価値や未来の車社会への関心が高まった。
 - ・生徒の多くが安全性への意識向上と技術への興味を高めるきっかけとなった。
- 一方課題として
- ・安全性や快適性の向上という利点に注目が集まった一方で、高齢者の運転支援や自動運転の倫理的課題など、社会的な視点からの考察が浅くなりがちだった。



センサーの動きや障害物の前で車両が停止する様子



アイサイト自動ブレーキ乗車体験

【能力・スキル】

サステナビリティ理解・デジタルリテラシー・コンセプチュアルスキル
アントレプレナーシップ

【連携企業】埼玉スバル株式会社

11月26日（水）【授業名・プロジェクト名】「ICTによる地域課題の解決NTTe-City Labo 視察」
1年自動車科・普通科日「自動車実習・自動車工学」「科学と人間生活」「公共」で実施

【授業概要】

- ・ICTを活用した地域課題解決のアイデアや最新技術を体験できる場であるNTT東日本の「NTTe-City Labo」を訪問して課外授業として実施。
 - ・訪問に先立ち、生徒たちは越生町の課題について個別にテーマを設定して当日は、スマート農業、ドローン eSports など、幅広い分野の展示を見学・体験し、それらの技術を越生町の課題解決にどう活かせるかを考えさせる。
 - ・その後、施設で得た知識や体験を基に、課題解決策をレポートにまとめさせる。この活動を通じて、生徒たちは地域の課題に対する関心を深めるとともに、2年生以降のマイスター・ハイスクール事業の基盤を形成することを狙いとして見学後は授業アンケートを実施し、生徒の学びや感想を収集する。
- レポートの課題は以下の3つとする。

1. 越生町の現状と課題

越生町が抱える課題（人口減少・高齢化・産業衰退観光客減少など）を簡単にまとめる。

2. NTe-City Labo で学んだ技術の紹介

見学の中で、記録した3つの技術の中から特に興味を持った1つを紹介する。

3. 選んだ技術を越生町でどう生かすか？

以下の内容を詳しく考察して、具体的なアイデアを提案する。

- ・活用する技術：NTe-City Labo で学んだ技術の中から1つ選ぶ。
- ・課題との関連：どのような課題を解決できるのか。
- ・具体的な活用方法：どのように導入し、どのような効果が期待できるか。
- ・導入に向けた課題：実現する際に考えられる課題（コスト・人材・環境など）とその解決方法を考えさせる。

【成果と課題】

- ・越生町の課題を自分ごととして捉えられた。
- ・先端技術が社会課題の解決にどう役立つか理解が深まった。
- ・技術を地域に応用する具体的な提案ができた。
- ・課題と解決策をセットで考える姿勢が育った。

一方課題として

- ・技術の専門的な部分は理解が不十分な生徒もあり、基礎知識の補強が必要。
- ・越生町の現状分析が表面的にとどまるケースもあり、データに基づく考察力の向上が求められる。
- ・技術導入の実現性（費用・人材・運用体制）については、より深い検討が必要。



NTe-City Labo 見学の様子

【能力・スキル】

越生町理解・サステナビリティ理解・デジタルリテラシー・コンセプチュアルスキル
アントレプレナーシップ

【連携企業】NTT 東日本株式会社 NTe-City Labo

2月25日（水）【授業名・プロジェクト名】「スバル自動車工場見学」

3年自動車科「自動車実習で実施」

【授業概要】

スバルビジターセンター（群馬製作所 矢島工場）での工場見学
自動車科で学んできた内容を、実際の量産工場の現場と結びつけて理解する。

【見学内容】

- ・映像による自動車生産工程の全体説明
- ・VRによる工場見学（プレス、溶接、塗装、組立、検査）
- ・最終組立工程の現地見学
- ・歴代車両や技術、安全・環境への取り組みの展示見学
- ・当日は、インプレッサ、クロストレック、フォレスター等の生産ラインを、生産状況に応じて見学する。
- ・見学後に、Google フォームによる気づきや学びをまとめたショートレポート課題を実施。

【成果と課題】

- ・プレス・溶接・塗装・組立・検査といった工程をVRや実地で確認することで、授業で学んだ工程知識が具体的な作業イメージとして定着できた。
- ・歴代車両や技術展示を通じて、自動車産業の発展や環境配慮の重要性を実感し、専門分野への興味関心が高まった。複数車種の生産ラインを見学することで、工程の共通性と車種ごとの違いを理解できた。
- ・インプレッサ、クロストレック、フォレスターなど、実際の生産状況に応じたラインを見学したことで、量産体制の柔軟性や工程管理の重要性を学ぶことができた。
- ・安全性の配慮や機械と人間との共同作業に驚いた。初めてのVRで少し酔ってしまったが今までの見学で見れない部分の見学ができてとても良かったといった感想も寄せられた。

一方課題として

- ・専門的な知識と現場の高度な技術を結びつけるための事前学習が不十分だったため、工場での高度な自動化技術や品質管理の仕組みを十分に理解するには、見学前に関連知識を整理しておく必要があった。
- ・工程ごとの技能と自動車科の授業内容の関連性を明確にする必要があった。生徒が「どの授業内容がどの工程とつながるのか」を理解しやすくするため、見学内容とカリキュラムの紐づけをより明確にすることが必要であった。



【能力・スキル】

スバルビジターセンターでの見学の様子

サステナビリティ理解・デジタルリテラシー・コンセプチュアルスキル
アントレプレナーシップ

【連携企業】スバルビジターセンター

■調理科

7月11日（金）【授業名・プロジェクト名】「特産品ランチ学内販売（さんちょう食堂）」
3年調理科「調理実習」で実施

【授業概要】

授業では、越生町の特産品である梅やゆずを活用し、新たなレシピの考案・試作を行い、グループごとに一品を完成させる取り組みを実施した。校内プレゼンテーションにより選出されたメニューは、調理科総合試食室を食堂に見立てた販売イベントにて提供された。

今年度は、A班「梅だれつけめん」、B班「柚子のボンゴレビアンゴ」、C班「梅のジュノベーゼパスタ」の3品が選ばれ、それぞれ50食、合計150食を調理・販売した。販売には越生町の職員にもご協力いただき、地域とのつながりを意識した実践的な活動とした。

生徒たちは教員のサポートを受けながら、原価計算や販売価格の設定を行い、事前のWEB申込による需要予測や食品ロスの抑制にも取り組んだ。また、校内ポスターやSNSを活用した広報活動、効率的なオペレーション計画、食券の自作なども行い、150食の完売を目指した。

【成果と課題】

- ・地域の特産品を活用した商品開発を通じて、地元資源への理解と関心が深まった。
 - ・原価計算や販売戦略、広報活動など、実社会に通じる実践的なスキルを身につけることができた。事前予約制の導入により、食品ロスを最小限に抑えることができた。150食すべてを完売し、達成感と自信を得ることができた。
- 一方課題としては
- ・調理当日の時間配分や人員配置に一部課題があり、提供時に混雑が発生した。一部の班で役割分担が偏り、作業の負担に差が出た。



生徒のプレゼンテーションによって選出された3種類のパスタ

【能力・スキル】

越生町理解・サステナビリティ理解・デジタルリテラシー・コンセプチュアルスキル
アントレプレナーシップ

【関連企業】なし

10月22日(水)【授業名・プロジェクト名】「チョコレートプロジェクト審査会」
調理科2年生(5月～10月)「調理実習」・「調理理論」・「食品」で実施

【授業の概要】

- ・今年度は山手調理製菓専門学校による指導に加えて、製造業者であるコント・ド・フェ様から販売用に大量生産する場合のコストという観点から生徒の考案したレシピについて指導を受ける。
- ・本プロジェクトは、越生町の特産品である梅やゆずとその6次産業化商品を活用し、バレンタイン商戦に向けたチョコレートレシピの開発と販売を目指す3年目の取り組み。
- ・特産品や6次産業について学んだ後、山手調理製菓専門学校様の指導を受けて試行錯誤しながらレシピを考案する。
- ・Canvaを活用したプレゼン資料作成や発表を通じてICTスキルを磨き、審査会の運営では主体性や協働力を発揮させる。プレゼンテーションにおいては、論理的思考や表現力も育成する。
- ・現在、選出されたレシピを基に製品化や箱詰めの準備を進めており、2月の販売時には生徒が売場に立ち、商品と地域のPRを目指す。

【成果と課題】

- ・レシピ開発や審査会を通じ、ICTスキルや企画力に加え思考力や発表力を向上させることができた。また、審査会運営は生徒の主体性を高め、地域課題への理解を深める機会となった。
- ・流通や価格設定についても学び、販売活動を通じて、実践的な学びをさらに深め、越生町特産品PRと地域課題解決に貢献した。

一方課題として

- ・レシピ開発から審査会運営、販売活動まで多岐にわたる内容を限られた時間で進める必要があり、準備や練習が不十分になった場面もあった。



今年度発売された3種類のチョコレート

【能力・スキル】

越生町理解・サステナビリティ理解・デジタルリテラシー・コンセプチュアルスキル
アントレプレナーシップ

【関連企業】山手調理製菓専門学校

11月20日(木)【授業名・プロジェクト名】「飲食店オープン講座」

1年調理科「家庭基礎」で実施

【授業概要】

- ・「飲食店オープン講座」は、カフェオーナーを(産業実務家)教員として、アントレプレナーシップ育成を目的に実施する。
- ・生徒は事前に、自分が飲食店を開業するならどうするかを考える個人ワークを行い、お店の名前や内容、目玉商品、立地などを企画させる。授業では、自身の開業経験を交え、業態・コンセプト設定、ターゲット選定、利益モデル作成、立地選定、資金調達など開業準備に必要な知識を学ぶ。
- ・情報発信やリピーター獲得の重要性、経営における価値提供や利益率向上のポイントについても具体的に解説してもらう。生徒は講座を通じ、開業への興味や実現可能性を具体的に感じてもらう。

【成果と課題】

- ・生徒は飲食店開業に必要なプロセスや経営のポイントの一部を理解できた。アンケート結果は、多くの生徒が「いつか自分でもチャレンジしたい」と回答し、特に「自分のお店のコンセプトを考えること」に興味を示した。授業を通じてアントレプレナーシップを育み、将来のビジネスに必要なスキルや視点を養う成果が得られ始めた。

一方課題として

- ・開業に必要な資金計画やリスク管理、継続的な運営に関する理解が十分に深まっていない生徒もいて、経営の実務面についてはさらなる学習の必要性が明らかになった。
- ・コンセプトづくりには興味を示す一方で、実際に事業を成立させるための数字や法律、衛生管理などの要素に対する意識が弱い点も見られた。



飲食店オープン講座授業の様子

【能力・スキル】

デジタルリテラシー・コンセプチュアルスキル・アントレプレナーシップ

【関連企業】オクムサ・マルシェ

11月20日(木)【授業名・プロジェクト名】「料理写真撮影」

1年調理科「調理実習」で実施

【授業概要】

- ・地元カフェオーナーであり産業実務家教員でもある浅見氏の、料理写真撮影の基礎と応用を学ぶ授業。まず、生徒が自己流で写真を撮影し、その後、構図、照明、盛り付けなど具体的な撮影テクニックを学び、再撮影を実施する。
- ・授業では、料理写真の目的や視点を明確にし、美しさや見る人を意識する重要性を強調させる。さらに、スマホの操作方法や撮影ボックス、レフ板の活用も紹介してもらう。
- ・この授業は、クリスマスコンテストでの料理写真撮影に備えた事前学習であると同時に、調理科の活動や飲食業界で役立つ実践的なスキルを育むことを目的とする。また、写真撮影を通して見る人の視点を考える思考力の育成も目指す。

【成果と課題】

- ・授業後、生徒の写真撮影のスキルは大幅に向上した。明るさやピントが良好で料理がはっきり見えることや、ものの配置、光の使い方でここまで写真が変わることが実感として理解できたという感想も聞いた。
 - ・授業を通じて、撮影技術のみならず、見る人を意識する姿勢が身についたことが確認された。
- 一方で課題として
- ・背景・小物・光の方向など、より高度な演出に挑戦できた生徒は限られていた。
 - ・SNS発信や商品撮影を想定した「目的に応じた写真づくり」までは到達していない生徒が多く見られた。



インスタ映えする写真の撮り方個人指導

【能力・スキル】 **デジタルリテラシー**・**コンセプチュアルスキル**・**アントレプレナーシップ**

【関連企業】 オクムサ・マルシェ

12月4日（木）【授業名・プロジェクト名】「クリスマスコンテスト」

調理科1・2年生11月・12月19日 「調理実習」で実施

【授業の概要】

- ・クリスマスコンテストとして、生徒がクリスマスにふさわしいレシピを考案し、完成した料理を写真撮影した上で、WEB投票を通じて評価を得る取り組みを実施する。
- ・1年生はパスタ、2年生はクリスマスケーキをテーマに設定し、調理だけでなく撮影や表現力を磨く機会とする。特に2年生は撮影写真をポスター化し、デザイン力も身に付けさせる。
- ・従来の紙媒体での投票をWEB投票に変更し、全校生徒や保護者、関係者が参加できる形を採用する。この取り組み活動を通じて、学校全体の一体感を醸成し、生徒にとっては学んだスキルを実践し評価される体験とする。

【成果と課題】

- ・生徒は調理技術だけでなく、撮影や表現、投票システム構築を通じて多様なスキルを発揮させる。

- ・保護者や関係者からの感想により、作品が他者に評価される実感を得られるようにした。WEB投票への移行により参加者が増加し、イベントの規模を拡大することができ、結果として、生徒の学びの意欲や自己肯定感が向上する成果が得られた。

一方課題として

- ・撮影・表現・システム構築など複数のスキルを扱うため、得意・不得意の差が大きく、全員が同じレベルで習得できたとは言い切れない。

- ・特にデジタル操作やWEB投票の仕組み理解に苦戦した生徒もいて、サポート体制の強化が必要な場面も見られた。



1年生クリスマスコンテスト優秀作品



2年生クリスマスコンテスト優秀作品

【能力・スキル】 デジタルリテラシー・コンセプチュアルスキル・アントレプレナーシップ

【関連企業】 オクムサ・マルシェ

12月18日(木) 【授業名・プロジェクト名】 「薬膳を学ぶ」

1年調理科 調理実習で実施

【授業概要】

- ・日本薬科大学との高大連携による薬膳をテーマにした学習を実施。越生町特産の梅やゆずを薬膳レシピに活用することを目指す。
- ・オンラインによる事前授業では薬膳の基本知識を学ぶ。具体的には、薬膳と漢方の違い、日本における食薬区分や注意点を学び、今後の調理活動に向けた土台を築く。
- ・大学訪問を通じて薬草園や漢方資料館を見学し、生徒が考案した薬膳ドリンクレシピで実際試飲して、越生の梅やゆず、はちみつを調合して一番飲みやすいドリンクを制作する。

【成果と課題】

- ・事前授業を通じて、生徒は薬膳や漢方に対するイメージを見直し、薬膳が身近な健康促進の手法であることを理解することができた。また、薬膳と漢方の違いについても一定の理解が進み、健康と食の関係に対する関心や学習意欲の高まりが感想からも確認された。

一方課題として

薬膳や漢方に関する専門用語や背景知識に対しては、初めて触れる生徒も多く、理解の深さには個人差が見られた。特に、実生活への応用や具体的な活用方法については、まだ十分にイメージできていない生徒もいて、今後は実践的な調理体験や事例紹介を通じて、より具体的な学びにつなげる工夫が必要になる。



日本薬科大学での薬膳授業

【能力・スキル】 **コンセプチュアルスキル**・**アントレプレナーシップ**

【関連企業】 日本薬科大学

12月18日(木) 【授業名・プロジェクト名】 「さんちょう食堂から学ぶ金融リテラシー」
調理科3年生 資格演習で実施

【授業概要】

これまでに実施してきた「チョコレートプロジェクト」「さんちょう食堂」「利益還元タコタコライス」などの実体験を背景として、将来起業していくためにも、事業を継続していくための利益の重要性や資金繰りの基礎を理解させる目的で実施した。授業では、キャッシュレス決済による売り上げ入金サイクルの遅れに着目し、黒字倒産や運転資金の考え方を解説する。売上げや利益が出ていても、現金の動き次第で事業継続が難しくなる構造を理解したうえで、グループごとに条件を変えて資金繰りを検討するワークを実施した。

地元にある飯能信用金庫の職員が産業実務家教員として担当し、金融機関の実務に基づく説明を行う。実社会の専門家が一貫して授業を担うことで、学びが現実の経済活動に直結していることを生徒が実感できる構成で実施。

【成果と課題】

- 生徒のアンケートからも「売上があっても入金が遅れると現金が足りなくなる」といった理解が多くみられ、キャッシュレス決済に伴う資金繰りの構造が具体的にとらえられていることが確認できた。
- 収支のバランスを取る難しさや、利益を生み出すための工夫、資金の流れを意識した計画の立て方など、起業に必要な視点を身につけることができた。
一方課題として
- 資金繰りの計画特にキャッシュレス決済の導入による資金の流れがうまく理解できない生徒もいた。
- 飲食業の開業率や廃業率の高さに驚く生徒も多く、事業を成功させるための計画と資金管理については、理解できない場面も見られた。



飯能信用金庫の職員による金融リテラシー授業

もし、毎日営業したら？

- 月曜日から土曜日まで営業（日曜日はお休み）
- 毎日150食分を準備して提供
- 販売価格は400円
- 1食当たりの材料費は360円（原価率90%）
- 日曜日に次週の材料を一括購入して準備をする

1食当たり利益：400円-360円=40円

400円×（1-90%）=40円

90%

1週間分の仕入れ代金：360円×150食×6日分
= 324,000円

必要な資金を計算しよう 15分

- 6グループに分かれて資金繰りに必要な資金を計算
- 各グループで条件を変えて実施

【共通条件】

- 1食の価格 400円
- 1食の原価 400円×90%=360円
- 販売数は固定 1日150食×6日(月～土) = 900食
- 仕入れ 日曜日に翌週分を一括仕入れ
- キャッシュレス手数料 3%

【グループ別条件】

	キャッシュレス支払率	入金タイミング
1班	15%	1週間後
2班	30%	2週間後
3班	15%	3週間後
4班	60%	2週間後
5班	15%	4週間後
6班	90%	2週間後

本日のまとめ

①食堂を題材に現金の動き → 資金繰りを知る

②事業を続ける為に利益をだす → 売上・経費・利益を知る

事業を続けるには
「資金繰り」を知り、
「利益を出す」が必要です

【能力・スキル】

コンセプトアルスキル・アントレプレナーシップ

【関連企業】 飯能信用金庫

2月5日(木) チョコレートプロジェクト最終仕上げ

社会福祉法人かえで様との共同で今年度バレンタインで販売するチョコレート650個を協働で完成させ2月6日・7日・11日の3日間で販売する。

【成果と課題】

社会福祉法人かえで様との連携により、昨年と同様共同作業が実現した点は、協働の実験という意味からも大きな成果となった。地域とのつながりを深め、共に目標を達成する経験は、今後の活動にも良い影響を与えた。越生町内では「うめその梅の駅」およびOTIC、町外では川越丸広百貨店にて販売したほか、企業販売としてNTT 東日本埼玉支店様および株式会社タカインフォテック様にて販売を実施した。いずれの販売場所でも、早期に完売し生徒たちにとっては貴重な経験となった。

一方課題としては

販売が3日間に限られていたため、より多くの人に届ける機会が限られてしまった可能性がある。今後は販売期間の拡大や、事前予約・オンライン販売の導入なども検討できたらと思っている。



最終工程福祉作業所かえで様での袋入れ作業

seiwagakuen
3個入り ¥1000

しあわせ時間

友達、2年調理科が作り上げたこのチョコレート!
ぜひあなたの幸せ時間に
このチョコレートもご一緒させてください。

ハミエールブランシェ
チョコの味が濃く、噛むと口の中でガナッシュが溶けていき、口の中にチョコの味が広がりとても美味しいです

Rêve de yuzu
チョコレートコーヒーの風味が鼻を突き抜け、あとから柚子の爽やかな風味が来て二段階で楽しめます

黒い愛
梅ジャムを使用したチョコレートで二種のチョコレートを使用し、ダークチョコレートの苦みと梅ジャムの爽やかな酸味が相性抜群で大人な味わいです



バレンタインチョコレート生徒販売風景

【能力・スキル】**越生町理解**・**サステナビリティ理解**・**コンセプチュアルスキル**
・**アントレプレナーシップ**・**アントレプレナーシップ**
【関連企業】社会福祉法人かえで

2月13日(金) 授業名・プロジェクト名】「梅サミットでの生徒発表」
3年生調理科 全国梅サミットでの講演と梅・ゆずレシピの試食会

梅を資源とする全国13市町の首長が一堂に会し、地域振興を目的とした交流を行う「梅サミットが、令和8年2月13日に越生町において開催された。

本校は、本事業において調理科3年生による発表講演および料理の提供を通じて参画した。事業の一環として、生徒によるマイスター・ハイスクール成果発表を実施し、発表テーマ「梅に気づかされた面白さと難しさ」のもと、梅の特性や活用を通じて得られた学びや課題について報告を行った。

また、成果発表にあわせて、来場者に対し梅を活用した料理の提供を行った。提供内容は以下のとおりである。

- ・里芋の煮っころがし(梅ソースがけ)
- ・梅だれつけ麺(パスタ)
- ・肉巻きおにぎり(梅だれ付き)
- ・バレンタインチョコレート(梅・ゆず使用)

※首長手土産品として活用

こうした取組を通じて、地域資源である梅の魅力発信を図るとともに、生徒の実践的な学びの深化に寄与した。

梅サミット 当日(2/13)



梅サミットでの生徒発表の様子と試食品

全国梅サミット協議会とは

【梅】を共通の資源とする加賀市町相互の情報交換や人的交流等を行うことにより、梅を生かした観光文化の振興と梅関連産業の発展を期し、もって地域振興に寄与することを目的として平成9年に結成されました。
令和8(2026)年現在、全国13市町が加盟しています。

加盟市町
埼玉県加賀市 | 富山県加賀市 | 福井県あま市 | 福井県小浜市 | 福井県大浜町 | 福井県南越前町 | 福井県山内町 | 福井県大飯町 | 福井県伊豆市 | 滋賀県彦根市 | 滋賀県高島市 | 滋賀県東高島町 | 滋賀県米原市 | 滋賀県甲斐市 | 滋賀県日野町 | 滋賀県大津市 | 滋賀県彦根市 | 滋賀県高島市 | 滋賀県東高島町 | 滋賀県米原市 | 滋賀県甲斐市 | 滋賀県日野町 | 滋賀県大津市

イベントプログラム

2/13(金)
記念講演会・特産品抽選会
時間 14:00~15:00(開催13:00)
会場 ニューサンピア埼玉おごせ 試観の間
演題:「梅に気づかされた面白さと難しさ」
講師:清和学園高等学校 調理科 生徒
清和学園高等学校 調理科生徒より、梅を使った3種類の学生の試食会
※試観の間は、入場をお断りする場合がございます。

2/14(土)
首長会議・総会
時間 15:00~16:30
会場 ニューサンピア埼玉おごせ 梅園の間
テーマ:「梅の可能性を引き出す『若者達と未来へ』」
※全国梅サミット協議会共同発表のみ

2/14(土)
視察・記念植樹
時間 9:00~11:30
株式会社社会情報推進工研究所・越生自然体験村センター・越生梅林・世界無名戦士之墓園

令和8年 越生梅林 梅まつり
2/14(土) 8:30~16:00
会場 越生梅林
埼玉県加賀市越生町大字釜山113番地付近
入場料 中学生以上500円
駐車場(無料)500台

オープニングセレモニー
2月14日(土)10:00~
武蔵越生高等学校和太鼓部 青龍の演奏

ミニSSL
明後期開中の土・日・祝日
10:00~15:00

梅語り
明後期開中の土・日・祝日
17:30~19:30

ライトアップ
2月21日(土)・2月28日(土)
17:30~19:30

(一社) 越生町観光協会創立70周年 記念大抽選会
開催期間中、有料入場券を対象に入場券裏に必要事項を記入し、応募券・抽選券・申込みの中からお抽選で570名に当選が当たる。
※その他、イベントも開催予定です。

お問い合わせ 第31回全国梅サミット協議会 事務局(埼玉県越生町産業観光課)
〒350-0494 埼玉県加賀市越生町大字釜山900-2 TEL:049-292-3121(平日8:30~17:15)

2月～3月3日（火）授業名・プロジェクト名】「卒業作品展」

3年調理科「総合調理実習」・「調理実習」で実施

【授業の概要】

本校では、3年間の学びの集大成として、毎年卒業作品展を開催している。これまでは、お世話になった保護者の方々に松花堂弁当を提供してきたが、当日のコミュニケーションが十分に取れない場面も多く、課題として残っていた。

昨年度からその反省を踏まえ、マイスター・ハイスクール事業の一環として、越生町の特産品を取り入れた料理をビュッフェ形式で提供するスタイルへと変更した。松花堂弁当はサンプルとして提示。生徒の成長した姿を保護者により身近に感じていただくとともに、保護者・生徒・越生町の関係者が自然に交流できる場を創出することも狙いの一つとして実施した。

調理だけでなく、使用機材、配膳方法、来場者の動きを想定し動線設計、盛り付けや装飾など、立食ビュッフェ形式特有の運営技術について実践的な学習させる。

保護者MHS関係者約80名の来場を想定し、和・洋・中デザート4班体制で実施。各班が町の特産品を活用したレシピを1品以上盛り込み、松花堂弁当の展示と立食ビュッフェの提供を通して、3年間培ってきた技能を発揮する構成として実施した。

【成果と課題】

・このプロジェクトは、生徒が3年間の調理実習の集大成として、ビュッフェ形式による卒業作品展を実施した。接客の5原則を学ぶことからスタートし、企画・運営・設営に至るまで、生徒自身が主体的に関わることで、自主性や責任感を育む貴重な機会となった。

・当日は、来場した保護者との積極的なコミュニケーションも見られ、学びの成果を直接伝える場として大きな意義を持った。実際のサービス現場を想定した実践的な経験は、生徒にとって卒業後活かせるスキルとなり、成長を実感できる取り組みとなった。

・初めての大規模な実践となるため、時間管理や役割分担において戸惑う場面も見られた。特に、限られた準備期間の中で、全体のスケジュールを把握しながら動く難しさや、チーム内での連携不足による作業の偏りが課題ともなった。

<p>協力 松柏軒レストラン（香川調理製菓専門学校）</p> <p>地元食材 越生町特産物加工所</p> <p>梅 梅干し 梅ジャム ねり梅</p>  <p>柚子 ゆずジャム</p>  <p>-1-</p>	<p>～スローガン～ 3年間集大成</p> <p>～案内～ 松花堂弁当会場は5階特別教室 立食パーティー会場は、5階講堂です！</p> <p>～タイムスケジュール～</p> <ul style="list-style-type: none">・11時30分 開場 受付開始（音楽室前）・12時00分 立食開式（講堂） ■ 学校長挨拶 ■ 会場説明・13時30分 閉式の言葉 生徒代表挨拶 <p>-2-</p> 
---	--

卒業作品展のチラシ

【能力・スキル】

越生町・サステナビリティ・デジタルリテラシー・コンセプチュアルスキル

アントレプレナーシップ

【関連企業】女子栄養大学/香川調理製菓専門学校 松柏亭レストラ



卒業作品展の様子

3月5日（木）【授業名・プロジェクト名】「豊洲市場見学」
3年調理科 「総合調理実習」で実施

【授業の概要】

本見学では、授業で学んできたことを、水産・青果の仲卸売場を中心に、仕分け・運搬・出荷準備といった市場での作業工程の観察に加え、衛生管理やデジタル活用、持続可能な取り組みについて理解を深めることを目的として実施した。

【見学内容】

- ・水産・青果の仲卸売場を中心とした自由見学
- ・仕分け、運搬、出荷準備など市場での作業の観察
- ・市場における衛生管理、デジタル活用、持続可能な取り組みの確認
- ・見学後に、Google フォームによる気づきや学びをまとめたショートレポート課題を実施。

【成果と課題】

- ・仕分け、運搬、出荷準備といった一連の作業を実際に観察することで、物流の流れや仲卸業務の役割を具体的に把握することができた。教室での学習では得にくい、現場ならではのスピード感や判断の重要性を体感できた点は大きな成果である。
- ・水産・青果という生鮮品を扱う現場において、衛生管理がどのように徹底されているかを確認することで、食品流通における安全確保の仕組みを理解できた。衛生区画の分離や作業手順の工夫など、現場の具体的な取り組みを学ぶ機会となった。
- ・在庫管理や出荷情報の共有など、市場内でのデジタル活用の実例を確認することで、伝統的な市場業務とデジタル技術が融合しつつある現状を把握できた。業務効率化やトレーサビリティ向上の視点を学ぶ機会となった。
- ・廃棄物削減やリサイクル、環境負荷の低減に向けた取り組みを知ること、食品流通におけるサステナビリティの重要性を理解することができた。
- ・外国人観光客が多く、市場関係者のおかげで私たちの生活が支えられていることが理解できた。市場では、個人で動いているのではなく、全体が1つのチームとして成り立っていることが理解できたといった感想もあった。

一方課題として

- ・見学で得た情報が多岐にわたるため、学びを体系的に整理する振り返りの機会が不足しており、理解の深まりに個人差があった。
- ・現場でのデジタル技術の活用を確認できた一方、その導入背景や運用上の課題について深く理解するには、事前知識が不足していた部分があった。
- ・サステナビリティ理解の視点は確認できたものの、見学内容と自分たちの学びや将来の職業観との結びつけが十分でない生徒も見られた。

【能力・スキル】

デジタルリテラシー・コンセプトチュアルスキル・アントレプレナーシップ
サステナビリティ理解

【関連企業】豊洲市場

(2) 実績の説明

■マイスター・ハイスクール理念に基づく教育課程の見直しと地域連携の推進

マイスター・ハイスクール（MHS）の理念に基づき、生徒の主体的な学びを促進し、地域社会との連携をさらに強化することを目的として、今年度より教育課程の一部見直しを行った。

まず、全学科の1年生を対象に、前期に「情報Ⅰ」の科目を集中的に配置するカリキュラムへと改編した。これにより、生徒がICTの基礎的な操作スキルを確実に身につけ、各専門分野においてもICTを活用した探究的な学びを展開できる基盤を整備した。

調理科では、学校設定科目「特産品開発」を新設し、地域資源を活用した商品開発や地域課題の解決に取り組む授業を実施した。生徒が地域の特性を理解し、実社会とつながる学びを深める機会となり、地域振興に寄与する実践的な教育活動として機能し始めている。

また、自動車科および調理科の双方において、地域企業との連携を一層強化し、地域課題の解決に向けた協働プロジェクトを推進した。これらの取り組みは、生徒の主体性を育むとともに、地域社会との共創を通じた実践的な学びの場として成果を上げつつある。

さらに、この3年間、MHS CEOを中心に、MHS ビジョンに掲げる「目指す人材像」や「価値観」を各学科のカリキュラムおよびプロジェクトに反映させる取り組みが進められてきた。その結果、教育活動全体に一貫性が生まれ、生徒がビジョンに基づいた学びを実感できる教育環境が整備されつつある。加えて、自治体・企業・大学との連携体制の構築が進み、授業や社会実践の場として具体的な協働プロジェクトを展開できる環境が整ってきた。教員・外部人材・地域関係者が共通の目的意識を持って取り組めるよう、調整や進行管理が行われたことも、円滑な連携の実現に大きく寄与した。

これらの取り組みを通じて、生徒が主体的に学び、社会とつながる力を育む教育環境が着実に整いつつある。今後も、MHSの理念を具体化する教育課程の工夫と地域連携の充実を図り、生徒の資質・能力のさらなる育成に努めていきたい。

■越生町との協働に向けたワークショップの実施（令和7年度）

地域を学びのフィールドとする探究活動を展開する中で、生徒が地域の持続的発展に主体的に関わる力の育成を目指してきた。一方、越生町においては、人口減少や高齢化、観光振興、交通といった多岐にわたる地域課題を抱えており、学校としてどの課題を教育活動に結びつけるか、また町として学校とどのように連携すべきかについて、明確な整理がなされていない状況もあった。こうした背景を踏まえ、令和7年度に本校教職員と越生町産業観光課の職員が一堂に会し、互いの目的や取組を共有しながら、協働の方向性を探るワークショップを実施した。本ワークショップでは、越生町が直面する人口減少や高齢化といった地域課題を共有し、学校と自治体が地域の将来像や教育との結びつきについて対話的に構想することで、協働の方向性を検討した。その結果、教育と行政が連携して地域を支えるための土台づくりが進み、地域とともに構想する協働の枠組みと探究的な学びの深化が図られた。こうした活動は、学校と越生町が地域課題を起点に連携の可能性を確かめる貴重な機会となり、今後の継続的な協働に向けた第一歩として大きな意義を持つものとなった。

8、 目標の進捗状況、成果、評価

本校は通信制高校でありながら国家資格の取得が可能であり、工業（自動車科）・家庭（調理科）を有する専門高校に匹敵する新しいスタイルの高等学校として全国唯一無二の存在です。この3年間越生町の課題に向き合いながら学びのフィールドとするプロジェクト型学習を通じて、生徒が地域の持続的発展に主体的に関わる力の育成を目指して、文部科学省のマイスター・ハイスクール事業として、越生町およびNTT東日本と連携し、「レジリエントな町と産業を支えるSX

(SustainabilityTransformation) 人材育成モデル」の構築に取り組んできた。

1年目には「地域課題への理解と対応」、2年目には「課題発見と解決能力の醸成」そして3年目には「実践と社会実装」という全体目標の中で、概ね7割から8割程度は目標に近づけたのではないかと思っている。

具体的に3年間の進捗状況と成果を振り返ってみると

・地域課題への理解と対応

越生町は「梅・ゆず」の生産地として知られてはいるが、農家の高齢化や後継者不足、販売単価の低下といった課題を抱えている。また、「ハイキングの町」としての観光振興も、期待されてはいるものの成果については、今一步の感があります。生徒たちがこれらの課題に対し、以下の方針で取り組み活動を展開してきた。

- (1) 地元の観光資源や農産物の魅力を再発見し、価値を高める
- (2) 食品加工や販売など、6次産業化を通じた地域活性化
- (3) 生徒の視点から新たなアイデアを創出し、地域に還元する

・主な取り組み内容

(1) 6次産業化の推進

梅やゆずを使ったオリジナル商品（バレンタインチョコレート、万能たれ・ドレッシング）などを企画・製造・販売し、地元イベントや道の駅での販売を通じて「越生ブランド」の魅力を発信してきた。

(2) 新技術の活用

Connected Car 技術を活かしたキッチンカーの運用を試験的に実施し、移動販売の可能性を探った。また、CASE (Connected, Autonomous, Shared, Electric) に関する研究を通じて環境に配慮したモビリティの未来について学んだ。

(3) 地域課題の共創的解決

越生町の職員とのワークショップやフィールドワークを通じて、課題を自ら発見し、解決策を提案・実行するプロジェクト型学習を重ねてきた。

・成果と学び

- (1) 地域産業と観光の活性化に貢献し、越生町の魅力を再発見・再発信できた。
- (2) 地元企業や自治体との連携を通じて、実社会での課題解決力を養うことができた。

■マイスター・ハイスクールの事業に取り組んだ中での生徒の変化

学んだ知識や技能を単なる教室内の学びにとどめず、地域や社会の実際の場面で活用することを前提に捉え直す姿勢が育まれ始めた。これにより、学びの目的意識がより明確になり、実践的な視点からの学習が進みつつある。

また、来校者や顧客、審査員といった第三者の存在を意識し、説明や発表の内容・伝え方に工夫を凝らすようになってきた。質問や評価といった外部からの反応を受け止め、それを自らの表現に反映させる力が高まってきている。

さらに、情報の収集や整理にとどまらず、デジタルツールを活用して資料や表現を整えることで、伝達の質を高めようとする工夫も見られた。ICTの活用が、より効果的なコミュニケーションへとつながってきている。

加えて、活動の中でうまくいかなかった点についても、具体的に言語化し、次の改善に結び付ける振り返りの姿勢が定着しつつある。失敗を学びに変える力が育っていることがうかがえる。

■マイスター・ハイスクール事業に取り組んだ中での教員の変化

(1) 学びの社会的実践への接続

従来、通信制の特質上教室内での授業完結が主であった学習活動について、社会での実践を前提とした授業設計や活動の構築が進められるようになってきた。これにより、生徒が学んだ知識や技能を実社会で活用する機会が増え、学びの意義を実感しやすくなっている。

(2)PDCA サイクルによる授業改善の兆し

授業や各種活動において、外部からの反応や成果を踏まえた振り返りが行われるようになり、教員および学校全体でPDCA サイクルを意識した改善の取り組みが見られるようになってきた。

(3)外部との協働による経験の蓄積

外部人材や関係機関との連携・協働を通じて、役割分担や調整を行いながら教育活動を推進する経験が校内に蓄積されつつある。これにより、学校外との連携体制が強化され、より多様な学びの機会が提供されている。

(4)柔軟な判断と対応の実現

生徒からの提案や主体的な働きかけに対して、従来の前例にとらわれることなく、計画や運営の見直しを行うなど、柔軟な判断と対応がなされるようになってきた。これにより、生徒の声を反映した教育活動の実現が進んできている

9、 次年度以降の課題及び改善点

■今後の課題と展望

マイスター・ハイスクール（MHS）の理念を持続的に実践していくため、以下の課題に対して段階的かつ着実な対応を進めていく。

教科評価のMHS 対応に関しては、通信制高校の特色であるR（レポート）・S（スクーリング）・T（テスト）のうち、特にレポート（報告課題）の評価方法について、従来の教科書ベースの内容にとどまらず、MHS における学びや実践内容を反映した形へと段階的にカスタマイズしていく必要がある。生徒の主体的な学びを適切に評価できるよう、無理のない範囲での移行を図りながら、評価体制の整備を進めていきたい。

次に、共通科目へのMHS 型学びの再配置については、学習指導要領および評価の枠組みを踏まえた上で、たとえばプレゼンテーションを国語科で、原価計算を数学科で扱うなど、MHS 型の学びの一部を共通科目に移行する取り組みを進めております。これにより、専門科目ではより発展的・実践的な内容に集中できる構造を整え、学校全体でMHS に取り組む体制づくりを目指していく。

さらに、普通科におけるMHS 的学びの展開も重要な課題と捉えている。共通的な学びで培った視点を活かし、普通科として地域課題に取り組む学びを、単独での実施に加え、自動車科・調理科など他学科との連携を通じて展開することで、学校全体でのMHS の取り組みに弾みをつけていくことが必要となってくる。

これらの課題に対し、今後も段階的かつ着実に対応を進めることで、マイスター・ハイスクールの理念を持続的に体現できる教育体制の確立を目指していきたい。

■自走に向けた具体的な取り組み

(1)地域との連携強化とプロジェクトの自立運営： 地域課題に根ざしたプロジェクト型学習を継続的に実施し、学校主導による持続可能な運営体制の構築を進めていく。

(2)越生自動車大学校を含む7年一貫教育(共育 Seven)の企業と共に育てるという枠組みの中で、各段階における学校ごとの到達目標を明確に設定し、体系的な人材育成を進めていく。7年後には、企業が求める人材像に的確に応えられるよう、他校にはない独自の強みを活かした教育活動を展開し、地域に根ざした実践的な学びを実現していく。あわせて、越生町への貢献も視野に入れ、地域とともに成長する教育モデルの構築を目指していく。

- (3) 現在、越生自動車大学校との連携を通じて、MHS の授業を基盤に企業後援会との関係が徐々に構築されつつある。今後は、毎年約41社におよぶ自動車業界との強固なネットワークを活かし、最先端技術をローテーション形式で選択・導入できる体制の構築を目指していきたい。これにより、生徒が常に最新の技術に触れられる環境を整備し、実践的な学びの場をさらに充実させていきたい。
- (4) 越生町のゼロカーボンニュートラル宣言を受け、自動車科では、CO₂削減に向けた実践的な取り組みを今年度から実施してきた。今後は、越生町が推進する「山並み連携」の地域連携を視野に入れ、EV（電気自動車）やハイブリッド車の整備技術、再生可能エネルギーの活用環境負荷の少ない整備方法など、次世代の自動車技術に対応できるカリキュラムを強化していきたい。また、越生環境フェアや地域イベントでは、生徒たちが自らの学びを地域に向けて発信するプレゼンテーション活動を展開し、地域住民との対話を通じて環境意識の共有と啓発を図っていきたい。
- (5) 商品開発の実用化と地域経済への貢献として、これまでに生徒たちが開発してきた「バレンタインチョコレート」や「梅・柚子の万能だれ」などの地域資源を活かした商品については、越生町のふるさと納税返礼品としての登録を目指し、地域ブランドの確立と経済活性化に寄与する取り組みを進めていきたい。
- (6) 高校生レストランの実現に向けた準備として地元の「道の駅うめその」の調理施設を活用し、調理科による「高校生によるレストラン」運営を実施する構想を検討中。地域住民との交流の場を創出するとともに、生徒にとっては実践的な接客・調理・経営の学びの場となることを目指す。
- (7) カリキュラムの柔軟な設計と評価の工夫 生徒の主体性を引き出すため、プロジェクト型学習を中心とした柔軟な教育課程の設計と、学びの成果を適切に評価する仕組みの整備を目指す。
- (8) 地元の高等学校とのネットワーク形成と発信力の強化 地域の高等学校や企業、自治体との連携を通じて、学びの幅を広げるとともに、本校の取り組みを広く発信し、モデルケースとしての役割を果たしていきたい。

■ マイスター・ハイスクール事業における CEO の役割について

清和学園 MHS において、CEO は MHS ビジョン（目指す人材像および価値観）を学校現場で実践可能な形で推進する中心的な役割を担った。以下に、具体的な取り組み内容を報告する。

(1) ビジョンの具体化と教育活動への反映

MHS が掲げる目指す人材像や価値観を、各学科のカリキュラムおよびプロジェクト設計に落とし込み、教育活動全体に一貫性を持たせる取り組みを行った。これにより、学校全体が共通の方向性を持って教育を展開する基盤が整えられた。

(2) 多様な主体との連携による学びの拡張

学校、自治体、企業、大学といった多様なステークホルダーとの連携を推進し、その協働関係を授業や社会実践の場へと展開した。これにより、生徒が実社会と接点を持ちながら学ぶ機会が創出された。

(3) 実践的な学びの場の構築

生徒が社会課題に主体的に向き合い、実践と振り返りを繰り返すことで学びを深める場を構成した。このプロセスを通じて、生徒の課題解決力や主体性の育成が図られた。

(4) 関係者の連携を促すマネジメントの実施

教員、外部人材、地域関係者が共通のビジョンに基づいて連携・協働できるよう、CEO が全体の視点整理および進行管理を担った。

■ CEO として3年間の授業を振り返って

3年間で振り返って見えてきた社会実践型 PBL
(地域を基盤とした専門高校の学びに関する報告)

地域を学ぶ過程で生徒が発見した課題に対し、専門分野で培った知識・技能を実践の手段として活用し、必ずしも成果の実装を求めずに、試行的に実社会で取り組む学習活動を積み重ねてきた。

普通高校では、課題解決が提案段階にとどまりやすい一方、専門高校では生徒が持つ専門的な知識・技能そのものを用いて実行に移すことができる。そのため、地域社会からのフィードバックを得ながら学びを深める実践が成立しやすいという特徴が見られた。

これらの取り組みを振り返る中で、専門高校ならではの学びの形として、本校では「社会実践型PBL」として整理できていると考えている。生徒が地域の課題に向き合い、専門性を活かして試行的に取り組むプロセスは、実社会とつながる学びとして大きな意義を持つ。

さらに、この過程において、生徒が地域の価値や魅力を改めて捉え直し、それを共有する場面が生まれていることも確認された。地域理解の深化と地域との関係構築が、学びの副次的な成果として現れている。

■今後の清和学園高等学校の自走に向けて期待すること

清和学園高等学校がマイスター・ハイスクール（MHS）の理念を学校全体で持続的に発展させていくためには、教科評価の改善、共通科目への学びの再配置、そして普通科における学びの展開が重要な鍵となる。以下に、今後の自走に向けて期待される具体的な方向性を示す。

1. 教科評価における MHS 対応の推進

通信制高校の特徴であるテストやレポート評価について、従来の教科書ベースの内容にとどまらず、MHS での学びや実践内容を反映した評価へと段階的にカスタマイズしていくことが求められる。無理のない範囲で評価方法を見直すことで、生徒の実践的な学びをより適切に評価できる体制の構築が期待される。

2. 共通科目への MHS 型学びの再配置

学習指導要領および評価の枠組みを踏まえ、プレゼンテーションを国語科で扱う、原価計算を数学科で扱うなど、MHS 型の学びの一部を共通科目へ移行することが重要である。これにより、専門科目ではより発展的・実践的な内容に集中できる構造が生まれ、学校全体としてマイスター・ハイスクールの取り組みを推進する体制が整う。

3. 普通科における MHS 的学びの展開

共通科目で培った視点を活かし、普通科として地域課題に取り組む学びを展開していくことが期待される。普通科単独での実施に加え、自動車科・調理科など他学科との連携を組み合わせることで、学科横断的な学びが生まれ、学校全体で MHS の取り組みにさらなる弾みがつくと考えられる。

10、生徒によるルーブリック自己評価

1. 目的

本評価は、マイスター・ハイスクール事業を通じて策定したビジョン（目指す人材像）に基づき、そこから整理したスキル・能力が生徒にどの程度育成されたかを把握することを目的として実施した。学びの成果を可視化し、事業全体の育成状況を確認するための基礎資料とする。

2. 対象・方法

対象は3年生とし、これまでの授業およびプロジェクト全体を振り返る形で、4段階評価・全10設問から構成されるルーブリック自己評価を実施した。生徒自身が学習過程を振り返り、成長の度合いを自己評価する形式を採用した。

3. 評価の考え方

- ・事業ビジョンから整理したスキル・能力を評価項目として設定した。
- ・各設問は4段階で構成し、レベル3を到達目標として設計した。

- ・知識量や正解を測定するものではなく、学びの過程と到達状況を可視化することを重視した。
- ・生徒の自己評価を通じて、事業全体としての育成状況を定量的に把握できるようにした。

4. 評価項目

本評価では、以下の5つの能力領域を設定した。

- ・デジタルリテラシー
- ・コンセプチュアルスキル
- ・アントレプレナーシップ
- ・サステナビリティ理解
- ・越生町理解

スキル・能力	確認内容	到達目標（レベル3）以上の回答割合		
		全体	自動車科	調理科
デジタルリテラシー	デジタル技術による社会・産業の変化を理解	85.7%	80.0%	91.7%
	タブレットなどのデジタルツールを用いて、自分の考えを表現・共有するなど、実際に活用できていたかを確認	73.5%	60.0%	87.5%
コンセプチュアルスキル	個人として課題に向き合う中で、考え直したり別のやり方を試したりできていたかを確認	81.6%	80.0%	83.3%
	集団の中で意見を整理し、話し合いを前に進める思考に関わっていたかを確認	89.8%	92.0%	87.5%
アントレプレナーシップ	考えるだけで終わらせず、一步踏み出して行動できていたかを確認	71.4%	64.0%	79.2%
	うまくいかない状況でも、工夫や改善を重ねながら取り組み続けられていたかを確認	79.6%	76.0%	83.3%
サステナビリティ理解	SDGsの考え方を通して、社会や産業が続いていくために大切な視点を理解できていたかを確認	83.7%	84.0%	83.3%
	その考え方を授業やプロジェクトの取り組みの中で意識できていたかを確認	40.8%	44.0%	37.5%
越生町理解	越生町がどのような課題や目標を持つ地域かを理解できていたかを確認	85.7%	80.0%	91.7%
	その理解をもとに、地域の役に立つことを考え、行動や実践につなげられていたかを確認	71.4%	64.0%	79.2%

①ルーブリック自己評価の結果

生徒のルーブリック自己評価については、事業ビジョンから整理したスキル・能力を評価項目ごとに設定し、各設問は4段階で構成し、レベル3を到達目標として設計した。知識量や正解を図る評価ではなく、学びの過程と到達状況を可視化。生徒の自己評価により、事業全体としての育成状況を定量的に把握した。評価項目はデジタルリテラシー・コンセプチュアルスキル・アントレプレナーシップ・サステナビリティ理解・越生町理解の5項目

自己評価の結果については、多くの設問でレベル3以上の回答率が80%以上となり、事業として目指してきた能力・スキルの育成はおおむね達成できたと考えられる。特にコンセプチュアルスキルについては、両学科とも個人及びグループで試行錯誤しながら課題に取り組む機会が意図通りに機能した。

②ルーブリック自己評価の結果について

全体的な評価結果から本事業における評価結果から、多くの設問においてレベル3以上の回答割合が80%を超えており、事業として目指してきた能力・スキルの育成は概ね達成されたと判断できる。

特に、コンセプチュアルスキルに関しては、両学科ともに個人およびグループでの試行錯誤を通じて課題に取り組む機会が意図通りに機能し、学習成果として明確に表れている。

一方で、相対的に伸びにくかったスキル・能力としては以下の点が挙げられる

- ・アントレプレナーシップについては生徒が自らの行動に対する主体性を自覚する機会が十分でなかったことが影響したと考えられる。
- ・サステナビリティ理解については実践活動とサステナビリティとの関連性を明確に認識する機会が不足しており、学びの意義づけが弱かった可能性がある。
- ・また、これらのスキルに関するルーブリックの設問や選択肢の表現が分かりづらく、生徒の自己評価に影響を与えた可能性もある。さらに、学科間での差異も見られた。「越生町理解」や「デジタルリテラシー（特に表現に関する設問）」においては、調理科の方が高い評価を得ていた。これは、調理科においてデジタル表現の機会や地域との接点が多く設けられていたことが要因と考えられる。

自己評価結果から見えた今後の課題としては、自動車科におけるデジタル表現機会・地域との接触機会を増加させていく必要性を感じている。

アントレプレナーシップやサスティナビリティ理解について、ルーブリックの表現を見直すと共に生徒自ら成長を実感できる学習設計を目指していくことが次の課題となる。

ルーブリック自己評価 回答割合

スキル・能力	設問	レベル4			レベル3			レベル2			レベル1		
		全体	自動車科	調理科	全体	自動車科	調理科	全体	自動車科	調理科	全体	自動車科	調理科
デジタルリテラシー	デジタル技術による社会・産業の変化を理解	40.8%	36.0%	45.8%	44.8%	44.0%	45.8%	12.2%	16.0%	8.3%	2.0%	4.0%	0.0%
	タブレットなどのデジタルツールを用いて、自分の考えを表現・共有するなど、実際に活用できていたかを確認	32.7%	24.0%	41.7%	40.8%	36.0%	45.8%	14.3%	24.0%	4.2%	12.2%	16.0%	8.3%
コンセプチュアルスキル	個人として課題に向き合う中で、考え直したり別のやり方を試したりできていたかを確認	38.8%	44.0%	33.3%	42.9%	36.0%	50.0%	14.3%	16.0%	12.5%	4.1%	4.0%	4.2%
	集団の中で意見を整理し、話し合いを前に進める思考に閉われていたかを確認	40.8%	40.0%	41.7%	49.0%	52.0%	45.8%	8.2%	8.0%	8.3%	2.0%	0.0%	4.2%
アントレプレナーシップ	考えるだけで終わらず、一歩踏み出して行動できていたかを確認	32.7%	28.0%	37.5%	38.8%	36.0%	41.7%	22.4%	28.0%	16.7%	6.1%	8.0%	4.2%
	うまくいかない状況でも、工夫や改善を重ねながら取り組み続けられていたかを確認	36.7%	36.0%	37.5%	42.9%	40.0%	45.8%	16.3%	20.0%	12.5%	4.1%	4.0%	4.2%
サステナビリティ理解	SDGsの考え方を通して、社会や産業が緩んでいくために大切な視点を理解できていたかを確認	40.8%	40.0%	41.7%	42.9%	44.0%	41.7%	12.2%	12.0%	12.5%	4.1%	4.0%	4.2%
	その考え方を授業やプロジェクトの取り組みの中で意識できていたかを確認	40.8%	44.0%	37.5%	0.0%	0.0%	0.0%	51.0%	44.0%	58.3%	8.2%	12.0%	4.2%
越生町理解	越生町がどのような課題や目標を持つ地域かを理解できていたかを確認	38.8%	36.0%	41.7%	46.9%	44.0%	50.0%	8.2%	12.0%	4.2%	6.1%	8.0%	4.2%
	その理解をもとに、地域の役に立つことを考え、行動や実践につなげられていたかを確認	32.7%	28.0%	37.5%	38.8%	36.0%	41.7%	22.4%	28.0%	16.7%	6.1%	8.0%	4.2%

技能コンクール ルーブリック自己評価

能力・スキル	観点	レベル4	レベル3	レベル2	レベル1
アントレプレナーシップ	練習のとき、自分からやることに気づいて、行動することができましたか？	まわりのことにも気を配って自分から声をかけたり、チームを助ける行動ができた	やるべきことに気づいて、進んで行動するようにしていた	やることは分かっていたけど自分から動くことは少なかった	言われてから動くことが多かった
主体性・行動力		10	11	2	1
コンセプチュアルスキル	作業の流れや順番、説明のしかたなどを、チームで考えて分かりやすくなるように工夫できましたか？	前さや説明をくり返し見直しで、観客やチーム全体のことを考えた工夫ができた	順番や説明をみんなで考えてやりやすく分かりやすい形にできた	基本の流れや説明は決めたけど、もっと工夫できたと思う	作業はできたけど、順番や説明の工夫まであまりできなかった
構想力・論理性		6	10	8	3
アントレプレナーシップ	他のチームのやり方を見て、「いいな」と思ったところを自分たちにも取り入れることができましたか？	まねするだけでなく、自分たちなりに工夫して取り入れることができた	いいところを見つけて、自分たちでもやってみた	「やってみよう」と思ったけど、あまり実行できなかった	他のチームは見ていたけど、自分たちにはあまり取り入れられなかった
柔軟性・応用力		4	14	6	2
デジタルリテラシー	練習の録画映像を見たことは、やり方の改善に役立ちましたか？	映像をもとにチームで具体的な話し合い、実際にやり方を試して良かった	映像を見て自分たちの動きを客観的に見直し、やり方を工夫するきっかけになった	どこが良かったかは何となく分かったが、はっきりとは改善につながらなかった	映像を見たが、自分たちの改善にはあまり結びつかなかった
メディア活用・分析力		5	11	8	1
コンセプチュアルスキル	練習でうまくいかなかったところを、やり方を立て直して良かったことがありましたか？	自分や仲間気づきをもとにチームで相談しながら何度も改善できた	うまくいかなかったところを見直して、やり方を変えることができた	気がなるところはあったけどあまりやり方は変えられなかった	直した方がいいところは分かったけど、どう直したらいいか分からなかった
改善・実行		11	11	0	3
コンセプチュアルスキル	「計画→やってみる→ふり返る→直す（PDCA）」の流れを意識して行動できましたか？	ふり返りや相談を通して、自分たちのやり方を何度も調整・改善することができた	ふり返って見直したことを、次の練習や本番に活かそうと意識した	なんとなくふり返りはしたが計画的に直すところまでではなかった	やることをこなすので構わずで、ふり返って直すところまでは意識できなかった
継続的改善		11	11	2	1
アントレプレナーシップ	本番では、練習で決めたことや工夫したことを発揮することができましたか？	練習で考えた工夫や改善を、本番でも自信をもって発揮できた	練習の成果を出せたと感じる場面がいくつかあった	一応はうまくできたが、まだ力を出しきれなかった	練習でやってきたことを本番でうまく出せなかった
実行力		9	9	5	2

11、その他

大野埼玉県知事が「ふれあい訪問」として来校し、マイスター・ハイスクールの取組を視察

- ・自動車科生徒が技能コンクールの内容と、ゼロカーボンに向けた環境実践の取組を発表
- ・調理科生徒がチョコレートプロジェクトの概要と審査会での実演プレゼンを行い、試食を通じて成果を紹介



生徒のプレゼンテーションを聞き入る大野知事



大野知事生徒のチョコレート試食

新商品開発：万能梅だれを梅サミットで披露

さんちょう食堂で提供した「梅だれつけ麺（パスタ）」が利用者に好評で「梅だれは他の料理にも合うのでは」という声を受けて、生徒が「万能梅だれ」として開発に着手



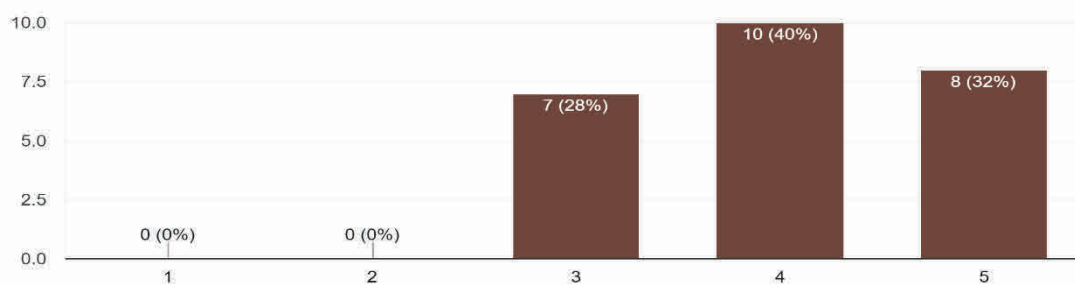
梅だれ開発に向けた試作

12、(各種授業アンケート)チョコレートプロジェクト

チョコレートプロジェクトの取り組みを通じて、他人との比較ではなく当初の自分を比較して、向上・できるようになったと思えるかどうか教えてください。

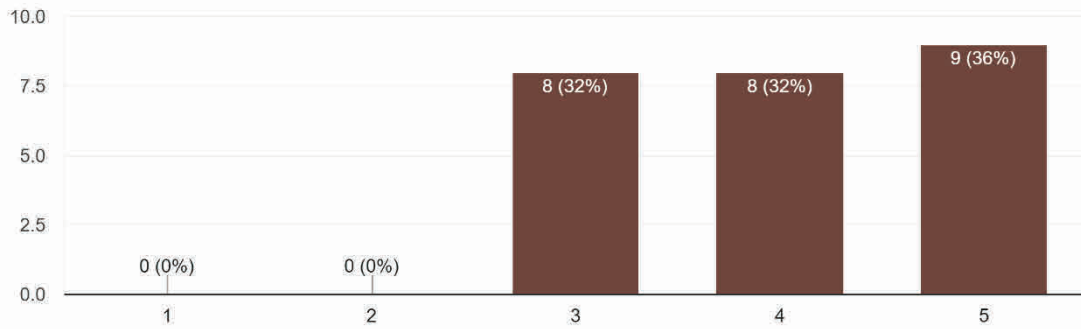
デジタルリテラシー（PCを使った資料作成や情報収集の力）

25件の回答



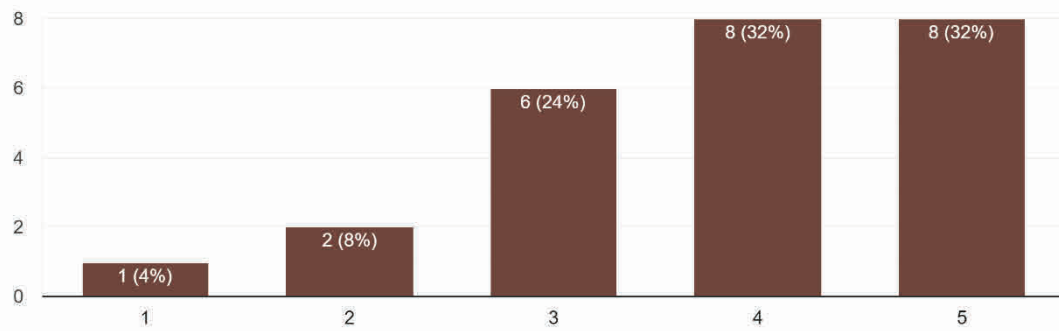
コンセプチュアルスキル（アイデアをまとめ、発展させる力）

25件の回答



アントレプレナーシップ（企画を立て、自主的に進める力）

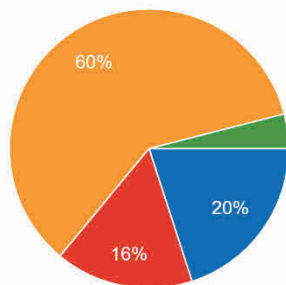
25件の回答



チョコレートプロジェクトを通して

問題を解決するために、いくつかの方法を考えて選択できましたか？

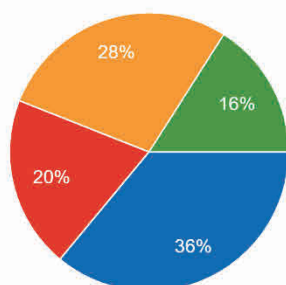
25件の回答



- 一つの方法を考え、実行に移して見ることができる。
- 複数の方法を考え、どれが良いかメモにまとめて選ぶことができる。
- メンバーと意見を出し合い、方法を比較してチームで話し合って決定することができる。
- 実行可能な方法をいくつか比較・評価し、メリット・デメリットを考えた上で最適なものを選択し、実行することが...

新しいアイデアや方法を提案し、実行に移せましたか？

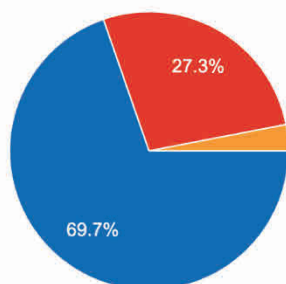
25 件の回答



- 自分の考えた方法を試しに実行してみることができる。
- アイデアをチームメンバーに提案し、役立つと判断したら試してみることができる。
- 他の人の意見を取り入れつつ、新しい方法を提案し、実行計画を立てて実践することができる。
- プロジェクトに役立つアイデアを積極的に提案し、問題解決や改善策を計画的に実践することができる。

今日の特別授業の満足度を教えてください。

33 件の回答

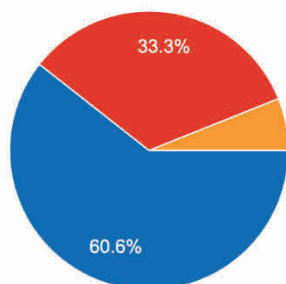


- 非常に満足
- 満足
- 普通
- 不満
- 非常に不満

(授業アンケート) 1年自動車科埼玉スバル特別授業_

スバルの歴史やどんな車を開発してきたのか等について、どの程度理解できましたか？

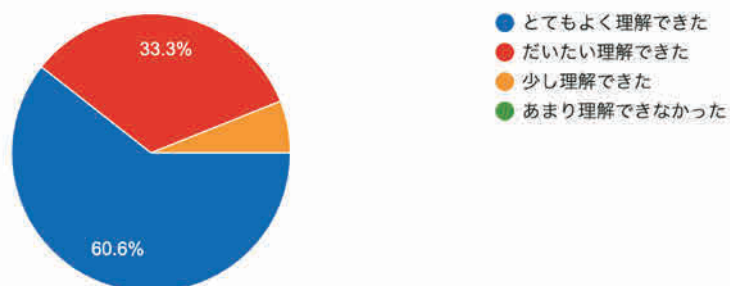
33 件の回答



- とてもよく理解できた
- だいたい理解できた
- 少し理解できた
- あまり理解できなかった

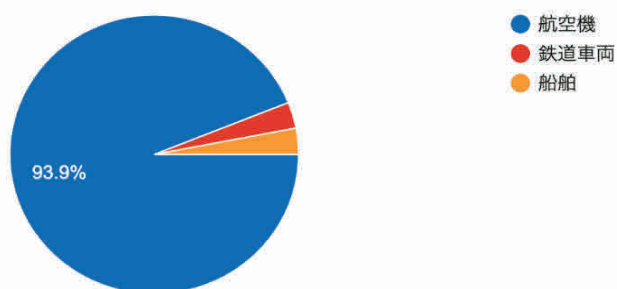
スバルの歴史やどんな車を開発してきたのか等について、どの程度理解できましたか？

33件の回答



(確認テスト) SUBARU (スバル) のルーツとな...会社を作っていたものは次のうちどれでしょうか？

33件の回答

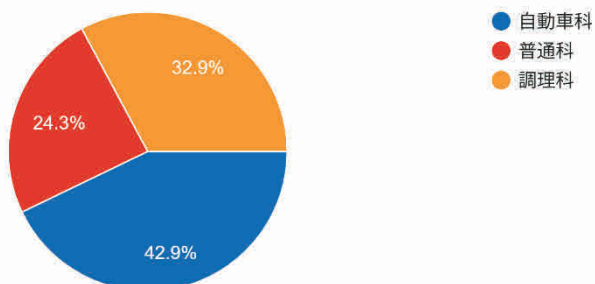


正解は「飛行機」

(授業アンケート)VR 特別授業

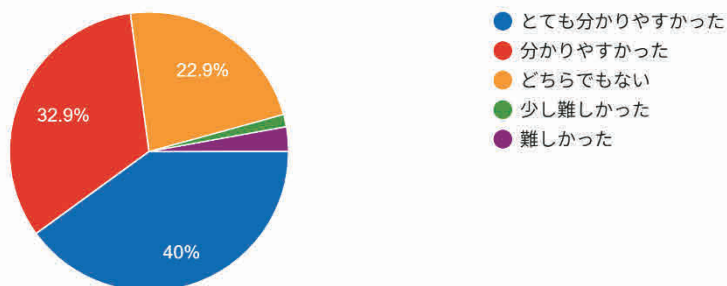
学科

70件の回答



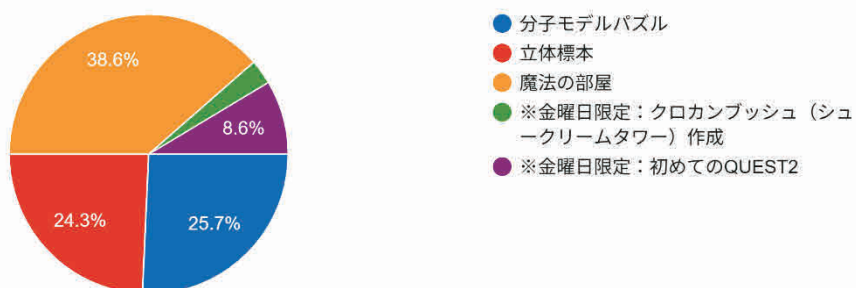
VR体験の内容は理解しやすかったですか？

70件の回答



VRゴーグルで体験したソフトで最も興味・関心があったのは？

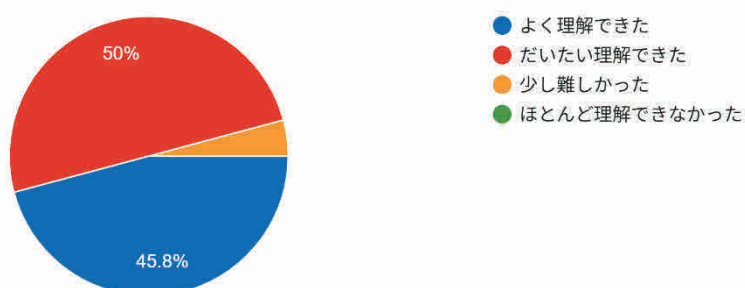
70件の回答



(授業アンケート) 2年自動車科_埼玉トヨタ特別授業

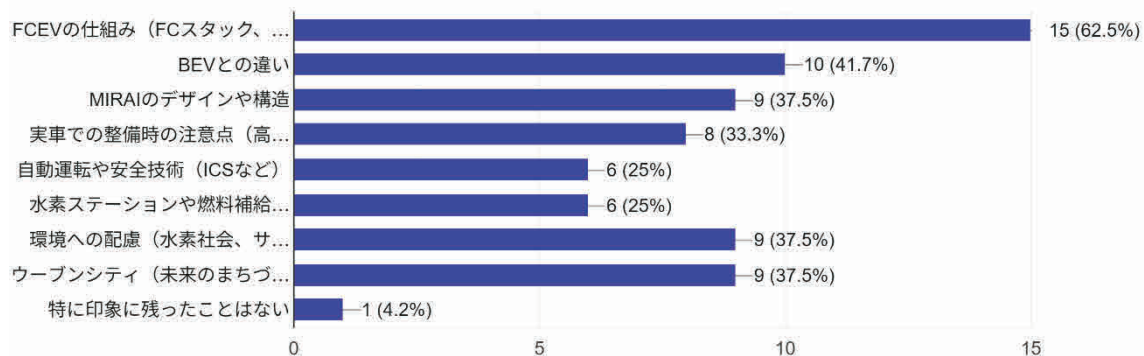
今回の授業全体（座学と実習）を通して、どのくらい理解できましたか？

24件の回答



今回の授業で印象に残った内容をすべて選んでください。

24件の回答



整備士として、今後どんな力を身につけたいと思われましたか？

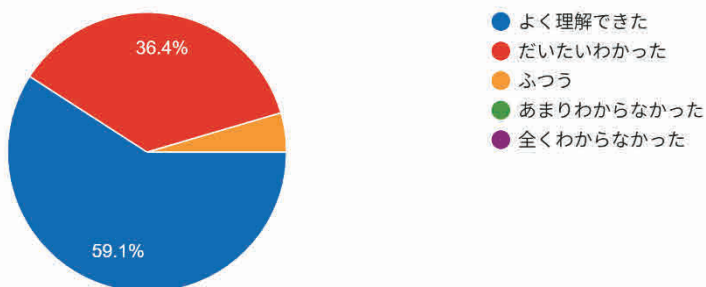
24件の回答



(授業アンケート)さんちょう食堂から学ぶ

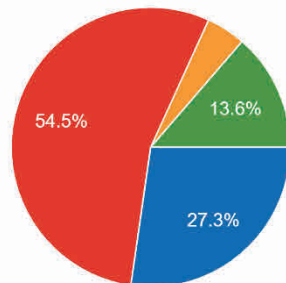
今日の授業の理解度を教えてください。

22件の回答



「資金繰り」に最も近いものはどれですか？

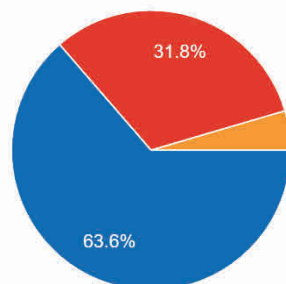
22件の回答



- 接客やサービスの質を上げること
- お金が入るタイミングと出ていくタイミングを考えること
- レジ作業をスピードアップすること
- できるだけ利益を増やすこと

今日の内容は、飲食店以外の仕事や生活にも使えると感じましたか？

22件の回答

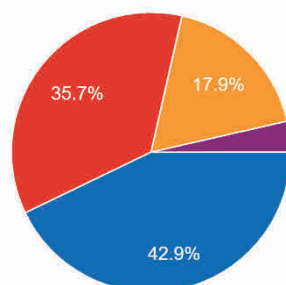


- とてもそう思う
- ややそう思う
- あまり思わない
- 思わない

(授業アンケート) カフェ開業・料理写真撮影

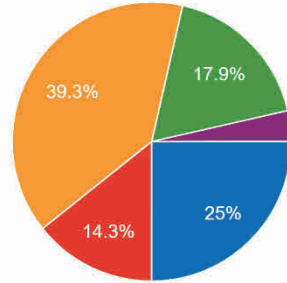
今回の授業で学んだ「企画・開店準備・繁盛のпой…」について、どの程度理解できたと感じますか。

28件の回答



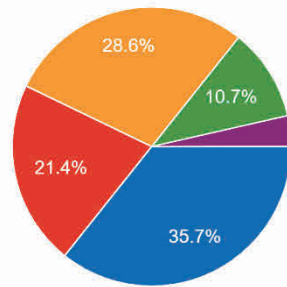
- とても理解できた
- だいたい理解できた
- 少し理解できた
- あまり理解できなかった
- 全く理解できなかった

授業を受けた後、「自分でお店を開く（起業する）」ことをどのくらい意識するようになりましたか。
28件の回答



- もともと考えていたが、より意識するようになった
- もともと考えていたが、特に変わらない
- あまり考えていなかったが、意識するようになった
- 全く考えていなかったが、少し意識するようになった
- 意識は変わらない（または以前より意識しなくなった）

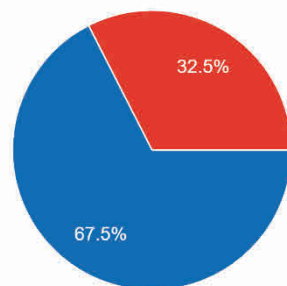
見栄えを意識した工夫
28件の回答



- 背景や置き方の工夫がなく、料理がきれいに見えなかった。
- 背景や置き方を少し工夫したが、まだ料理が引き立っていない部分がある。
- 背景や置き方を工夫して、料理がきれいに見えるようになった。
- 背景や置き方をしっかり工夫し、料理がとても魅力的に見えるようになった。
- 食べ物の写真を編集する

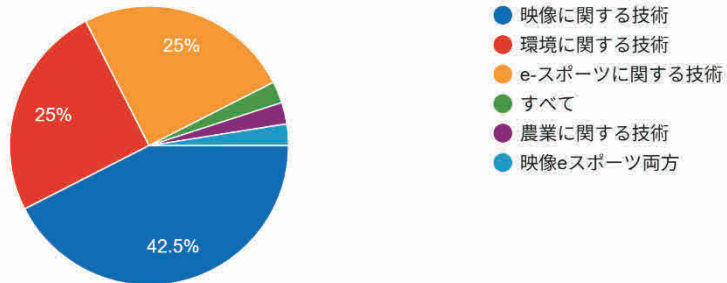
(授業アンケート) NTTe-City Labo 施設見学

学科
40件の回答

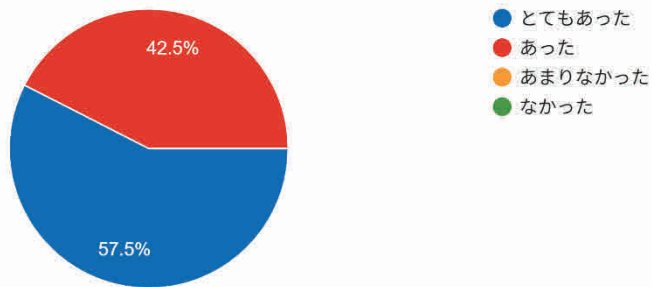


- 自動車科
- 普通科

e-City Laboで最も興味・関心があったのは？
40件の回答

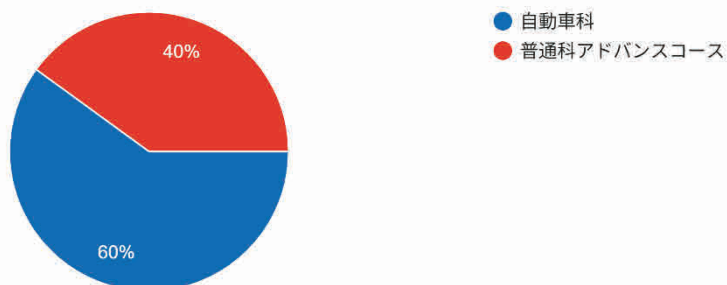


見学を通して、新しい発見や学びがありましたか？
40件の回答



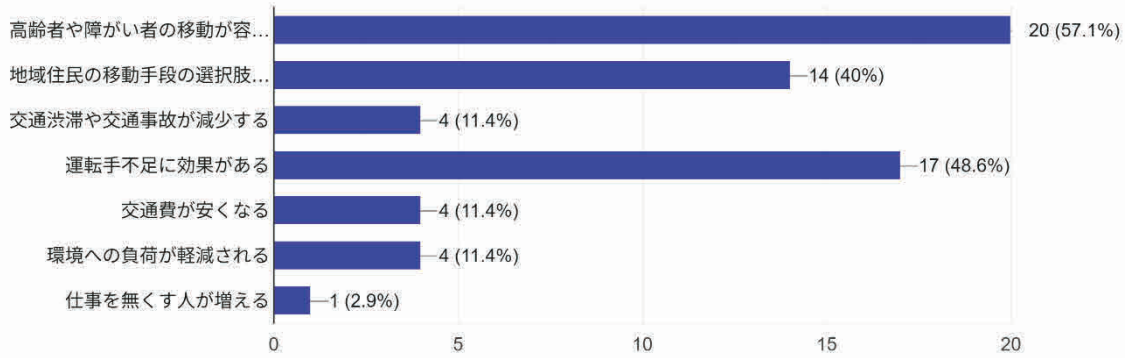
(授業アンケート) 埼玉工業大学特別授業

学科
35件の回答



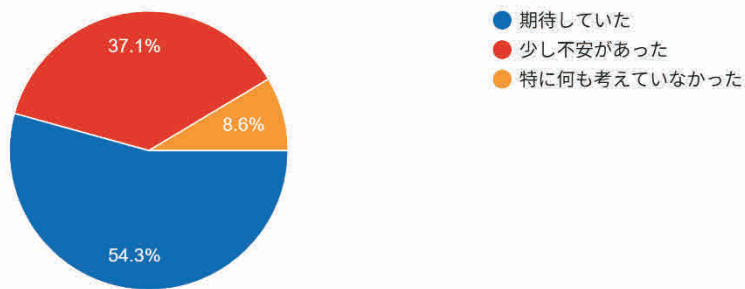
自動運転バスは越生町のような地域の交通にどのように貢献できると思いますか？

35件の回答



自動運転バスに試乗する前にどのような期待や不安がありましたか？

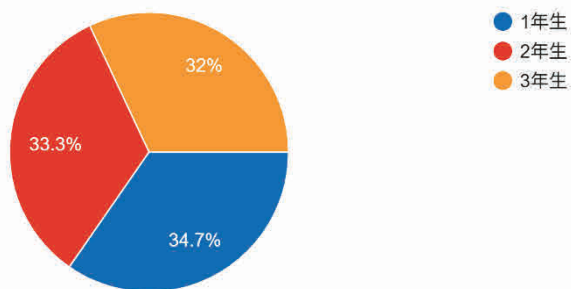
35件の回答



(授業アンケート) 越生町の特産品について (調理科1・2・3年)

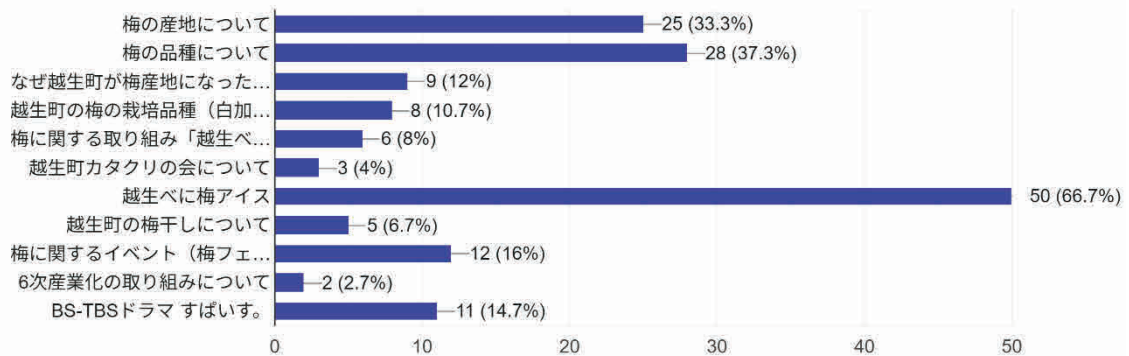
学年を教えてください

75件の回答



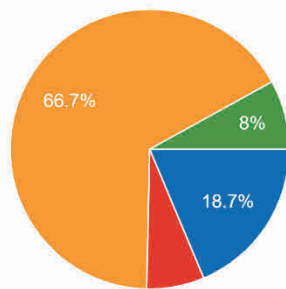
今日の授業で印象に残った内容を選んでください（最大3つ）

75件の回答



【確認テスト】 越生町の梅干しの特徴として正しいものを1つ選んでください。

75件の回答

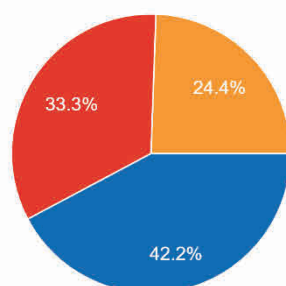


- 塩分が高く、干した後に水に戻して塩抜きしている。
- 塩分が20%を超えており、非常にしょっぱい味が特徴である。
- 塩分を10~13%に抑えて漬けており、梅のフルーティーな香りが残っている。
- 一切塩を使わずに漬けており、非常に甘く仕上がっている。

(授業アンケート)1 全_SDGs 特別授業

学科

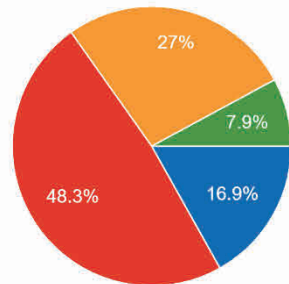
90件の回答



- 自動車科
- 調理科
- 普通科

授業を受ける前のSDGsについての理解・状況について教えてください。

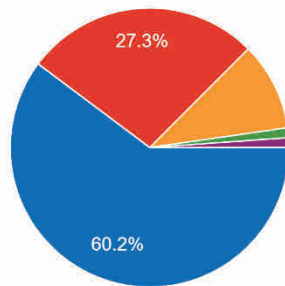
89 件の回答



- 意味や概要を理解できていなかった
- 意味や概要を理解していたが、特に行動していなかった
- 意味や概要を理解していて、今後行動しようと思っていた
- 意味や概要を理解していて、すでに行動している

個人の行動の重要性やSDGsとのつながりについて理解できましたか？

88 件の回答

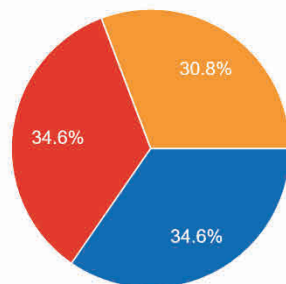


- 理解出来たと思う
- どちらかといえば、理解出来たと思う
- どちらともいえない
- どちらかといえば、理解できたと思わない
- 理解出来たと思わない

(授業アンケート)さんちょう食堂振り返り

所属班

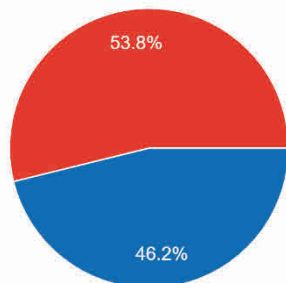
26 件の回答



- A班：梅だれつけ麺
- B班：柚子のボンゴレビアンコ
- C班：梅のジェノベーゼパスタ

Q1. 越生町の特産品を理解し、活かすことができた

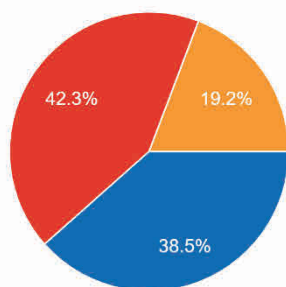
26 件の回答



- ととてもできた：梅や柚子の特徴や背景を理解し、自分の役割の中で積極的に活用・発信した
- できた：特産品の特徴を理解し、自分の担当作業で意識して使うことができた
- あまりできなかった：特産品を使ったが、どのような特徴や背景があるか意識できなかった
- できなかった：特産品の意義を理解しないまま使用していた／使っていなかった

Q3. 原価計算や価格の調整に関わられた

26 件の回答

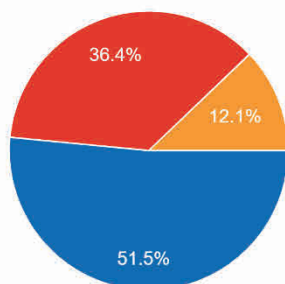


- ととてもできた：コストや利益を意識し、価格設定や調整に能動的に関わった
- できた：原価や価格のしくみを理解し、チームでの話し合いに参加できた
- あまりできなかった：内容を理解しきれず、他人に任せる場面が多かった
- できなかった：価格や原価に関する作業には関わらなかった

(授業アンケート) 日産 GT-R 特別授業_1 年自動車科

授業内容についてどれくらい理解出来たのか教えてください。

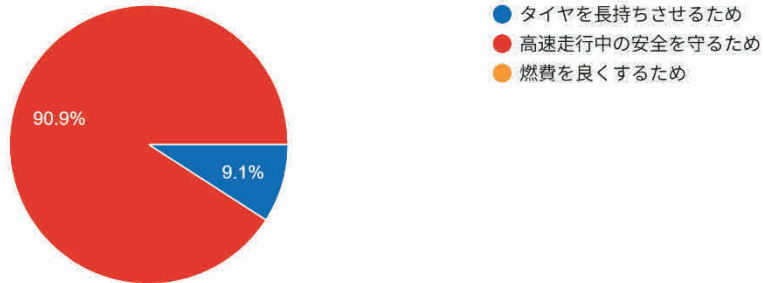
33 件の回答



- 非常に理解できた
- 理解できた
- どちらともいえない
- あまり理解できなかった
- 全く理解できなかった

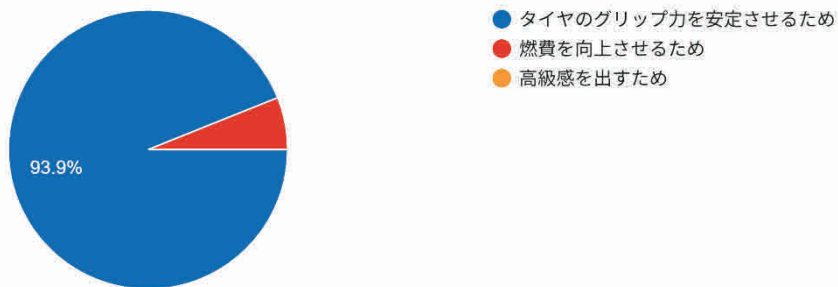
(確認クイズ) GT-Rがランフラットタイヤを採用している理由は何でしょう？

33件の回答



(確認クイズ) GT-Rの車両重量が重い理由として正しいものはどれですか？

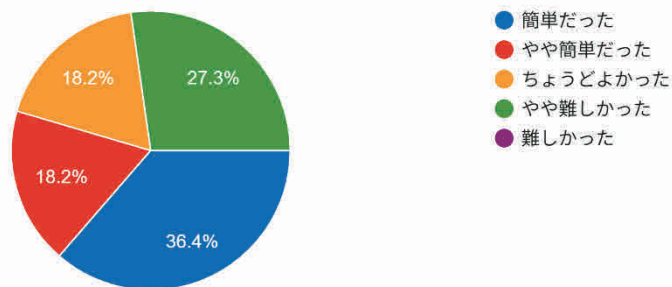
33件の回答



(授業アンケート) 資金繰り飯能信用金庫特別授業

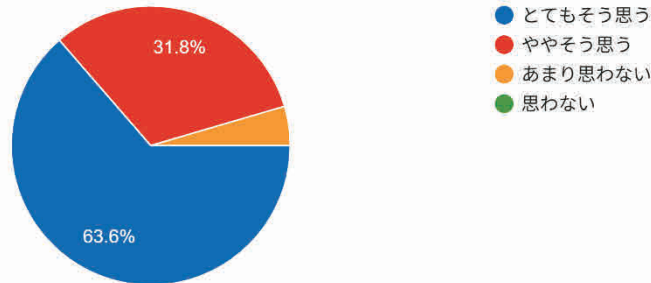
今日のグループワークの難しさはどうでしたか？

22件の回答



今日の内容は、飲食店以外の仕事や生活にも使えると感じましたか？

22件の回答

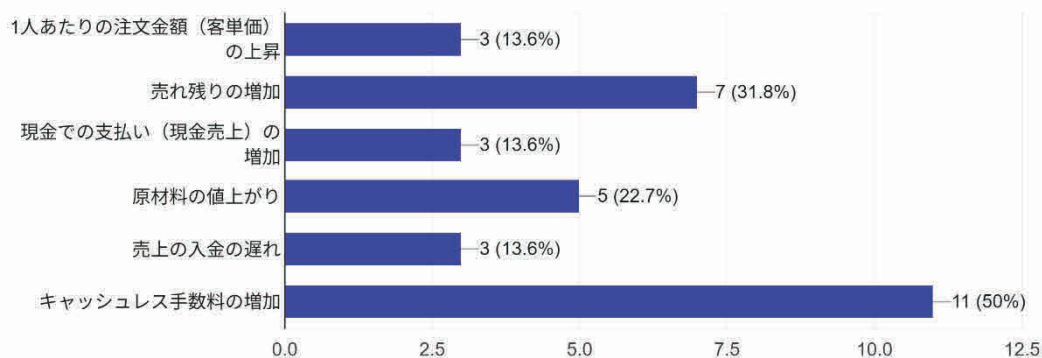


(授業の説明の中で) キャッシュレス導入で資金不足になった主な理由として、最も近いものはどれですか？

22件の回答

次のうち、資金繰りを直接悪くする可能性がある項目をすべて選んでください。

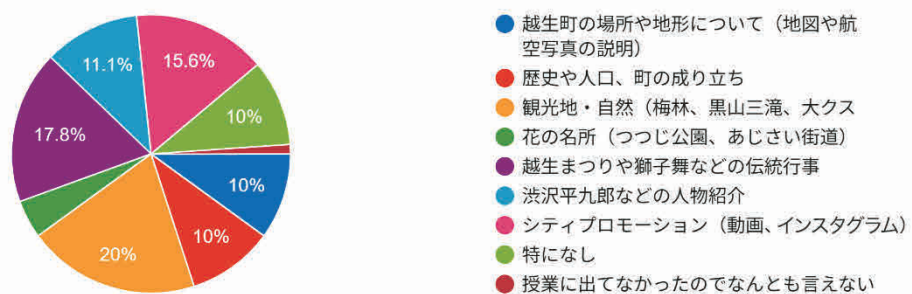
22件の回答



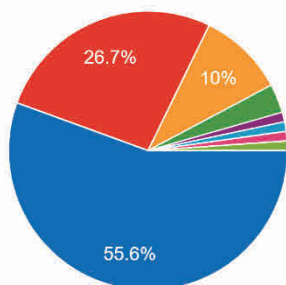
授業アンケート「越生町を学ぶ」

今日の授業で最も印象に残った内容を選んでください

90件の回答



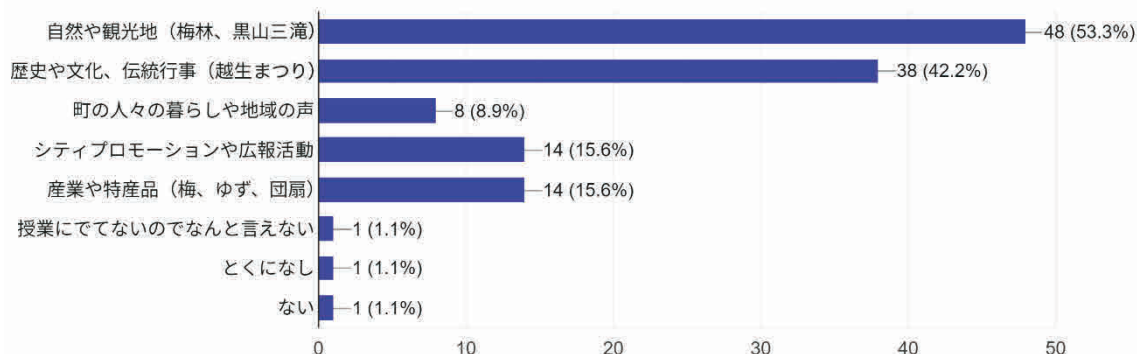
今日の授業を通して、越生町についてどのように感じましたか？当てはまるものを選んでください
90件の回答



- 初めて知ることが多く、越生町についてよくわかった
- いくつか知っていたが、新しい発見も多かった
- あまり知らないことばかりで、まだよくわからない
- もともと知っていたことが多く、あまりよくわからない
- 授業にでてないのでなんとも言えない
- 地元についてもっと知れることができた
- 自慢話にしか聞こえなかった

越生町について、これから調べてみたいテーマを選んでください

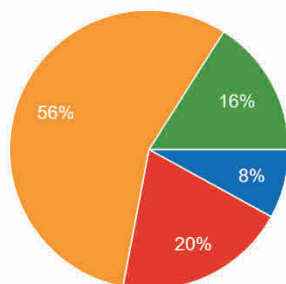
90件の回答



(授業アンケート) 技能コンクール

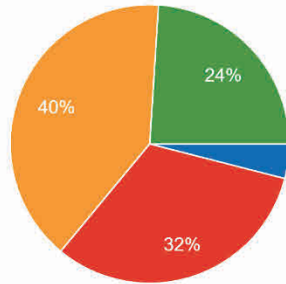
他のチームのやり方を見て、「いいな」と思ったことを自分たちにも取り入れることができましたか？

25件の回答



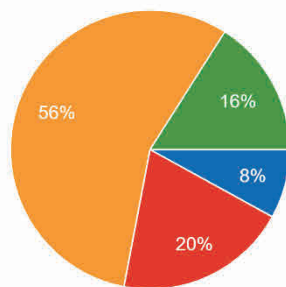
- 他のチームは見えていたけど、自分たちにはあまり取り入れられなかった
- 「やってみたい」と思ったけど、あまり実行できなかった
- いいところを見つけて、自分たちでもやってみた
- まねするだけでなく、自分たちなりに工夫して取り入れることができた

作業の流れや順番、説明のしかたなどを、チーム全体で分かりやすくなるように工夫できましたか？
25 件の回答



- 作業はできたけど、順番や説明の工夫まではあまりできなかった
- 基本の流れや説明は決めたけど、もっと工夫できたと思う
- 順番や説明をみんなで考えて、やりやすく分かりやすい形にできた
- 動きや説明をくり返し見直して、観客やチーム全体のことを考えた工夫ができた

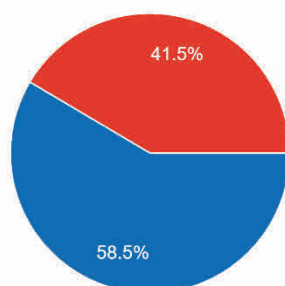
他のチームのやり方を見て、「いいな」と思ったことを自分たちにも取り入れることができましたか？
25 件の回答



- 他のチームは見ていたけど、自分たちにはあまり取り入れられなかった
- 「やってみたい」と思ったけど、あまり実行できなかった
- いいところを見つけて、自分たちでもやってみた
- まねするだけでなく、自分たちなりに工夫して取り入れることができた

授業アンケート ICT 基礎ゲームクリエイターから学ぶ

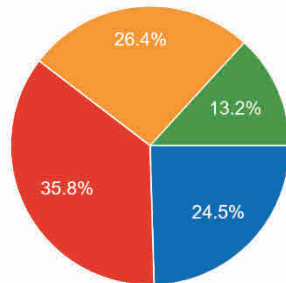
学科を教えてください
53 件の回答



- 自動車科1年
- 調理科1年

1. ゲームのしくみについて、どの程度理解できましたか？

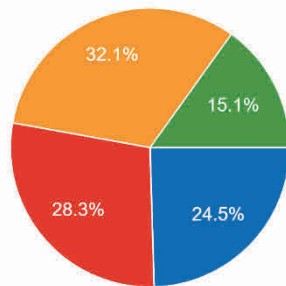
53件の回答



- レベル1：それぞれのスプライトをみたり、ブロックの一部しか見ておらず、全体のしくみがよくわからない
- レベル2：スプライトの動きや変数の意味をなんとなく理解できている
- レベル3：変数や処理の関係を考えながら、全体の流れを理解できている
- レベル4：ゲーム全体のしくみを他の人に説明できるくらいよく理解している

3. 自分なりに工夫したり改良したりできましたか？

53件の回答

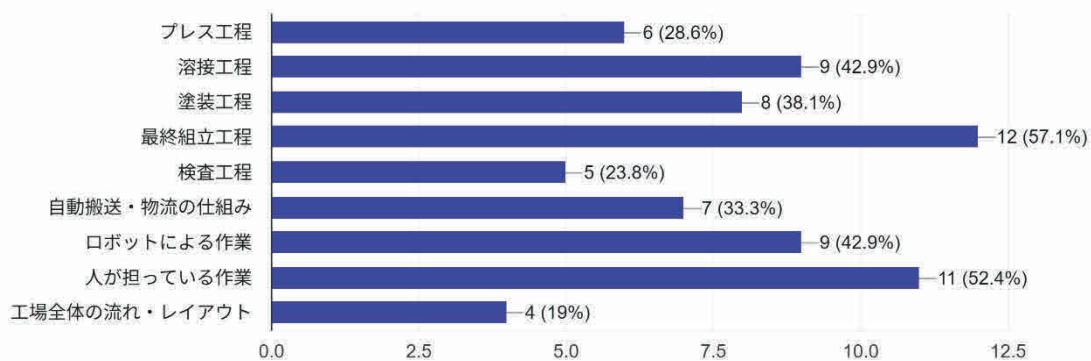


- レベル1：言われたことに取り組んだが、自分なりに工夫することはできなかった
- レベル2：言われたことをもとに、自分で少し変える工夫ができた
- レベル3：自分のアイデアでゲームを改良したり、新しい動きをつけたりできた
- レベル4：プレイする人のことも考えて、自分なりに面白いゲームにしようとした

授業アンケートスバル自動車見学

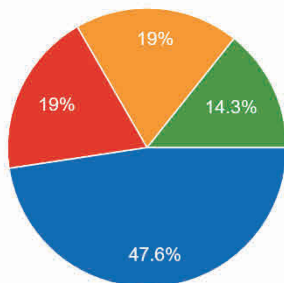
【設問1】 今回の工場見学で印象に残った工程（複数選択）

21件の回答



【設問2】印象に残った理由として近いもの（単一選択）

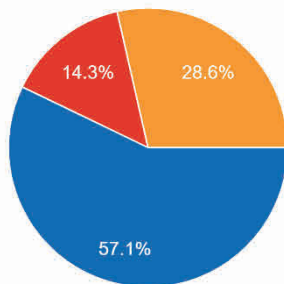
21件の回答



- 作業の正確さ・精密さを感じた
- スピードや効率の高さに驚いた
- 人と機械の役割分担が分かった
- 安全への配慮が強く感じられた
- これまでの学習経験と結びついた
- 初めて見る内容だった

【設問3】自動車生産に対する理解の深まり（単一選択）

21件の回答

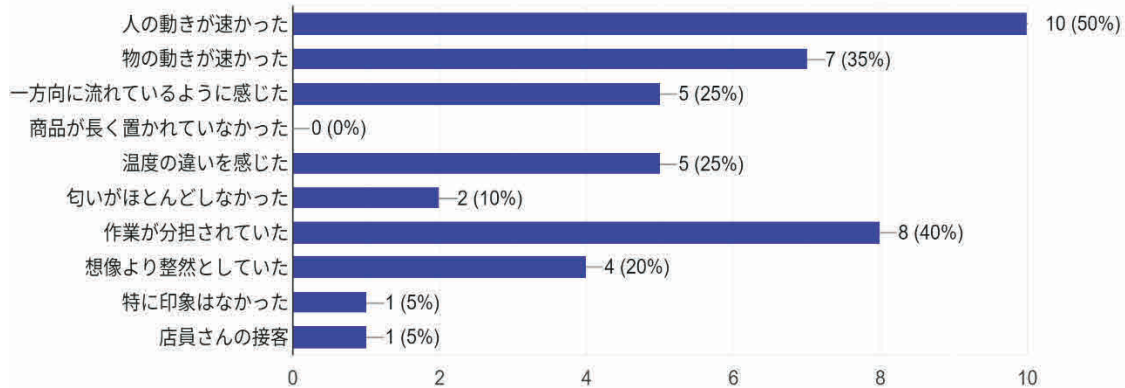


- かなり深まった
- 深まった
- 以前と比べて整理された
- あまり変わらない
- よく分からない

授業アンケート豊洲市場見学

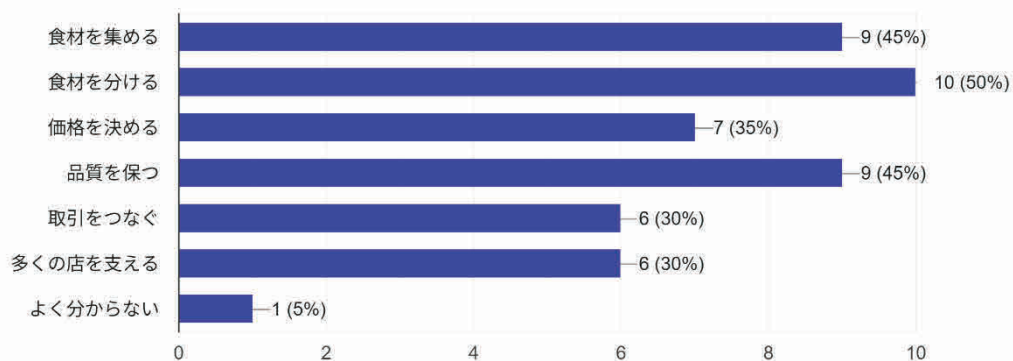
1. 市場（仲卸売場・青果棟）で印象に残ったことは何ですか？

20件の回答



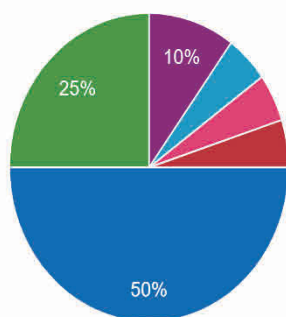
2. 市場はどのような役割を果たしている場所だと感じましたか？

20件の回答



3. もし市場の機能が止まったらどうなると思いますか？

20件の回答

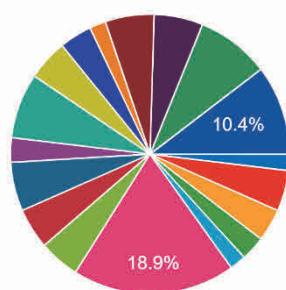


- 食材の価格が安定しなくなる
- 特定の地域や店だけが仕入れやすくなる
- 小規模な飲食店が仕入れにくくなる
- 食材の品質にばらつきが出る
- 情報（相場・産地など）が分かりにくくなる
- 食材の無駄や廃棄が増える
- 一部の人や企業に取引が集中する
- 影響は限定的だと思う
- 分からない

1年生調理科クリスマスコンテストWeb投票結果アンケート

所属

106件の回答

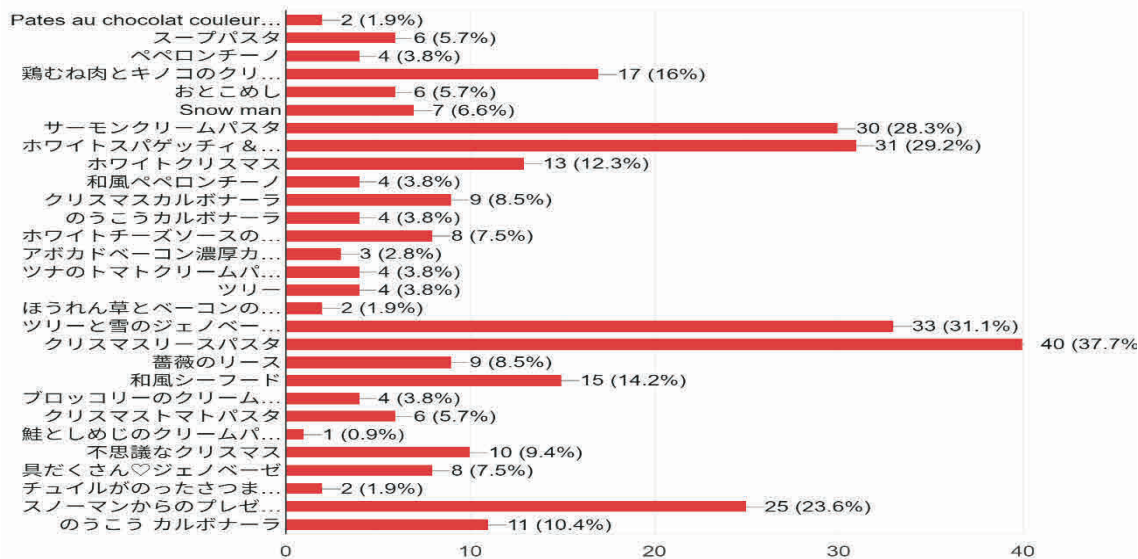


- 1年自動車科
- 1年自動車科 保護者
- 2年自動車科
- 2年自動車科 保護者
- 3年自動車科
- 3年自動車科 保護者
- 1年調理科 保護者
- 2年調理科

▲ 1/3 ▼

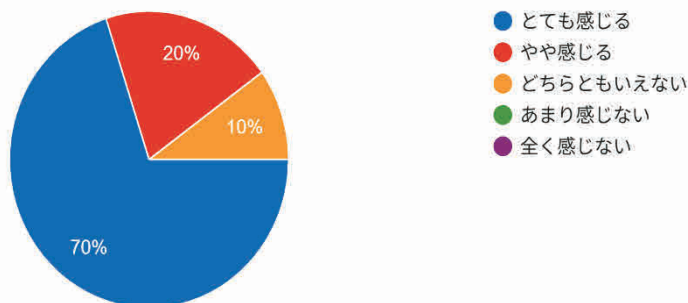
投票一覧

106件の回答



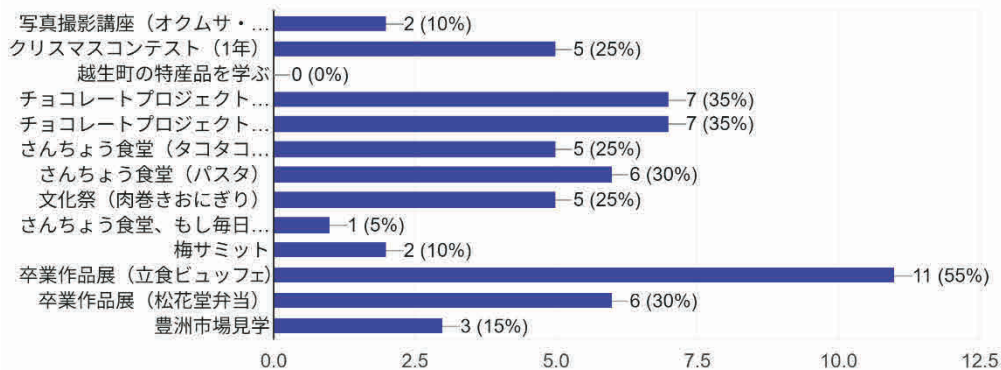
様々なマイスター・ハイスクール授業を通じて、自分が成長できたと感じますか？

20件の回答



これまでの調理科マイスター・ハイスクールの取り組みの中で印象に残っているものを3つ選んでください。

20件の回答



三年間の意思決定と設計思想

【はじめに 構造が動き始めた瞬間】

三年間の事業を振り返ると、ある時期から、取り組みがこちらの設計を超えて広がり始めた感覚があった。

チョコレートプロジェクトを核として、クリスマスコンテストが再構成され、生徒が自ら料理写真を撮影し、WEB投票で広く審査される形式へと変化した。写真を自ら撮るのであれば、その前段として撮影講座が必要になる。カフェオーナーによる写真講座が設定され、さらに飲食店開業講座へと展開した。一方で、チョコレートプロジェクトは後工程にも広がった。特産品を活用したレシピ考案、マーケティング、販売という構造は、校内ランチ販売へと拡張され、やがて卒業作品展へとつながった。

同じ構造は自動車科にも展開され、技能コンクールが単なる技能披露ではなく、「本番・競争・振り返り」を備えた教育装置として成立した。

物語の登場人物が、作者の手を離れて自ら動き出すような感覚であった。

しかし、それは偶然ではない。教育を動かす構造が形成された結果である。

本事業で構築したのは、個別の成果や単発の取り組みではない。不確実な時代において教育を更新し続けるために、理念を構造へと変換し、それを判断軸によって運用する枠組みである。

理念だけでは教育は動かない。構造だけでも足りない。その構造をどのような基準で運用するのかが問われる。

ここでは、以下の観点から三年間を整理する。

I. 理念を構造に変える

抽象的であったビジョンが、どのように具体的な設計へと転換されたのか。

II. 社会実践型PBLという設計思想

「本番・競争・振り返り」という構造がどのように見出されたのか。

III. 意思決定の中で形成された判断軸

実践の中で抽出された三つの軸が、どのように意思決定を支えたのか。

IV. 外部連携の設計

異なる目的を持つ主体と、どのように手段レベルで一致を構築したのか。

V. 自走とは何か

判断し続ける組織へと転換するために何を残したのか。

ここで示すのは、一つの成功事例ではない。教育を更新し続けるための設計思想と、その運用の軌跡である。

【I. 理念を構造に変える — 「雲」は掴める実態を持った】

本事業のビジョンは、「レジリエントな町と産業を支えるニューノーマル時代のSX人材養成モデルの構築」であった。

しかし、人材養成モデルと言われても、これまでの教育と何が違うのか、何を実践し、どのような力を育てるのかという具体性が伴わなければ、理念は現場に届かない。当初、教員からは率直に「雲をつかむような話だ」という声もあった。

そこでまず、人材像を具体化することから始めた。

当初は、デジタルリテラシー、コンセプトualスキル、アントレプレナーシップという三つのスキルを中核に据えた。しかし議論を重ねる中で、地域と産業を支えるという本来の目的に立ち返り、サステナビリティ理解と越生町理解を加え、五つの能力へと整理した。

だが、五つの能力もまた抽象的である。広く捉えれば高度な内容にも解釈できる。それをそのまま掲げても、生徒は何をすればよいのか分からない。

そこで、生徒が理解できる言葉に翻訳し、生徒が取り組める行動へと解釈し直した。

同時に、教員にも理解できる形へと落とし込んだ。学校の実態に合わせた形に再解釈することで、「これならできる」という感覚が徐々に共有されていったように感じている。

理念の具体化と学校への適合化は、最初にすべて設計し切ったわけではない。実践しながら問い直し、やりながら解像度を上げていった部分も大きい。

成果の可視化が求められる中で、各授業やプロジェクトが五つのどの能力を育成するのかをマトリクスとして整理した。整理することで取り組みの意図が明確になっただけでなく、「この活動はこの能力も育てているのではないか」という新たな気づきも生まれた。

翻訳し、可視化し、問い直す。

その営みの中で、教員にとっても理解可能な形で授業やプロジェクトの姿が徐々に明らかになっていった。

向かう先が、少しずつ見えてきた。

抽象的であった理念は、実践との往復の中で輪郭を持ち始める。雲は、やがて形を現し、掴める実態を持つようになったのである。

【Ⅱ. 社会実践型 PBL という設計思想】

Ⅱ-1. 教育刷新の前提 — 技術更新では足りない理由

産業界との連携を掲げた本事業の方向性からは、最新技術へ関心が向きやすい。

しかし、不確実性が高まり、変化の速い時代において、教育の刷新を教える内容や扱う技術の更新だけにとどめることは、本質的な対応とは言い難い。

もちろん、最新技術の習得は重要である。しかしそれは目的ではなく手段である。

技術は予測を超える速度で進化し、今日の最先端がすぐに次の技術へと置き換わっていく。生成 AI の急速な進展は、技術が予測を超える速度で進化することを象徴している。

重要なのは、技術そのものを追い続けるのではなく、技術を使いながら試行錯誤し、不確実な状況の中で価値を生み出し続ける力を養うことである。教師が正解を提示し、技能を伝授する教育は重要な役割を果たしてきたが、それだけでは十分ではない。生徒自身が問いを立て、試行錯誤し、他者と協働しながら価値を創出する経験を設計することが求められている。

社会では、多くの場面で個人の力だけでは完結しない。立場や専門性の異なる他者と協働し、調整し、合意を形成しながら前に進むことが前提となる。本カリキュラムでは、まず個人で考え、試行錯誤する経験を積み、その上で協働へと展開していく段階的な設計を行ってきた。個人での探究も、協働による創造も、いずれも不可欠である。

Ⅱ-2. 「本番・競争・振り返り」という構造

とりわけ専門高校は、普通高校以上に社会との距離が近い。学んでいる内容そのものがより社会に近い位置にある。だからこそ、内容の更新にとどまらず、学びの構造そのものを社会に接続し直す必要があった。その再設計は、専門高校にとってより切実な課題であった。

その構造として抽出されたのが、「本番・競争・振り返り」である。

本番とは、単なる発表会ではない。実際に社会と接点を持ち、結果が返ってくる場である。売れるかどうか、選ばれるかどうか、評価されるかどうか。教室内では得られない緊張感と責任がそこにはある。競争とは、他者との優劣を決めるための装置ではない。限られた条件の中で工夫し、試し、改善するプロセスを生み出す環境である。

振り返りとは、結果の良し悪しを判断することではなく、なぜその結果になったのかを考え、次にどう活かすかを構造化する行為である。

社会実践とは、単に社会と接することではない。実際の社会的文脈の中で行動し、その結果が返ってくる環境に身を置くことである。社会では、誰かがあらかじめ正解を示してくれるわけではない。行動の結果として反応が返ってくる。その反応を受け止め、再設計する。この往復こそが成長を生む。

評価は教員だけのものではない。企業、自治体、顧客、地域住民など、多様な立場からのフィードバックが返ってくる。その多面的な反応を受け止め、再設計を重ねる循環の中でこそ、生徒の思考は深まり、学びは更新され続ける。

振り返りは生徒だけのものではない。授業アンケートやルーブリック評価を通じて生徒が内省し、その結果を教員が読み取り、授業設計を修正する。

生徒が変わると、教員も変わる。

これは特定の教員の努力に依存する状態から、構造が改善を生み出す状態への転換であった。

単発の授業ではなく、明確なゴールと評価を持つ「プロジェクト」という単位が、この構造を成立させた。大小のプロジェクトを前後関係を持たせて配置することで、三年間のカリキュラムは一つの連続した設計となった。

【Ⅲ. 意思決定の中で形成された判断軸】

社会実践型PBLという構造を描くだけでは、教育は動かない。

理念を構造へと落とし込んだとしても、日々の授業設計や外部連携、リスク判断の場面において、何を抛り所に意思決定を行うのかが定まっていなければ、理念は抽象にとどまる。

事業推進の当初から、明確な基準が整理されていたわけではない。

現場では常に、

「これは本当にやるべきか」

「教育的に意味があるのか」

「実行可能か」

という問いに向き合いながら判断を重ねてきた。

その試行錯誤の中で、意思決定の抛り所が徐々に言語化されていった。それが、事業ビジョンとの整合性、教育的価値、実行可能性という三つの軸である。

1. 事業ビジョンとの整合性

地域課題の解決を通じた能力育成になっているか。

活動が単なる体験やイベントにとどまらず、本事業が掲げる人材像に接続しているかを問い続けた。

校内ランチ販売は、その再設計の象徴である。当初はチョコレートプロジェクトの利益を校内に還元する企画として構想された。しかしそれだけでは事業ビジョンとの接続が弱い。そこで特産品を活用したランチへと再設計し、さらにレシピを競い合って決定する形式を導入した。地域資源との接続と「競争」の要素を組み込むことで、ビジョンとの整合性を高めた。

ビジョンとの整合性は、活動の方向を定める軸であった。

2. 教育的価値

「本番・競争・振り返り」が設計に組み込まれているか。

「越生町を学ぶ」という取り組みは、地域理解という点で事業ビジョンと整合していた。しかし、単に調査してまとめるだけでは教育的価値は十分とは言えない。そこで成果物の作成と発表の場を設定し、投票やフィードバックを組み込んだ。本番の場を設けることで、学習は受動的な調査から主体的な実践へと転換した。

教育的価値は自然に生まれるものではない。構造によって設計されるものである。

3. 実行可能性

法制度、安全管理、資金、人員体制など、取り組みを持続可能にする条件が満たされているか。

実行可能性はビジネス判断に近い領域である。学校現場や教員にとっては必ずしも得意な分野ではなく、従来の教育活動では正面から扱われることの少なかった領域でもあった。

しかし、理念や教育的価値だけでは実践は成立しない。実行できなければ、それは教育にはならない。チョコレートプロジェクトは、この軸に直面した象徴的事例である。

初年度は専門学校との連携により製造体制を確保し、販売規模も限定的であったため、リスクは比較的抑制可能な範囲にあった。

しかし二年目、専門学校側の事情により従来の製造体制の継続が困難となり、新たに製造を外部委託する必要が生じた。その際、最低ロット600個という条件が提示された。

規模拡大を目指したわけではない。外部委託を選択する以上、600個を製造することが前提条件となったのである。

問題は、その数量を本当に販売し切れるのかであった。

販売確度を高めるため、百貨店バイヤーを審査員として迎え、販路との接続を強化した。また、地元CATVの社員を審査員に招き、メディア露出による認知拡大を企図した。製造条件に対して、販売戦略を設計に組み込むことで対応したのである。

さらに製造コストの問題が顕在化した。当初は前年度のレシピを前提に見積もりを行っていた。しかし、生徒が試行錯誤を重ねる中でレシピは複雑化し、想定していた製造コストを上回る水準となった。教育的には探究の深化であったが、実行可能性の観点では再設計が必要であった。

最終仕上げと箱詰めを学校側で担う案を検討したが、菓子製造業許可の問題が立ちはだかった。そこで、許可を有する福祉作業所との連携体制を構築した。法令リスクを回避すると同時に、地域との新たな接点を創出した。

さらに、最終仕上げや箱詰めを生徒が担うことで、製品が完成するまでのプロセス全体を自らの責任として捉える意識が高まった。製造工程の全部を外部に委ねるのではなく、一部を自分たちが担うことで、プロジェクトはより「自分ごと」としての学びへと深化した。

条件の変化や想定外の課題は、計画の破綻ではない。再設計の契機である。

実行可能性は挑戦を止めるための制約ではなく、挑戦を成立させるために構造を磨く視点である。

三つの軸は理論として先に存在していたのではない。実践の中で抽出され、共有され、磨かれてきたものである。

三つが揃わないからといって中止するのではない。不足があれば設計を変更し、軸に近づける。その再設計の積み重ねこそが、本事業の本質であった。

判断軸が共有されることで、教員間の議論も変化した。

「やるか、やらないか」ではなく、

「どうすれば軸に近づけられるか」という問いへと変わった。

それは、個人の熱意に依存する組織から、基準によって進化する組織への転換であった。

判断軸は固定された規範ではない。今後も実践の中で更新され続けるものである。

【IV. 外部連携の設計 — 目的を見失わず、手段を一致させる】

マイスター・ハイスクール事業は、産業界と学校が一体となって進める制度である。外部連携は付加的な要素ではなく、本事業の構造そのものである。

学校には実現したい教育がある。教育のために協力を依頼すること自体は誤りではない。

しかし、企業には企業の存在意義がある。教育だから協力するのが当然であるという前提では、連携は継続しない。

学校の目的を見失わず、同時にそれを押し付けない姿勢が必要である。

1. 相手の目的を読み解く

企業は教育の場面において、自らの利益を明確に語ることに慎重である。しかし、目的が存在しないわけではない。将来の人材との接点、社会的評価の向上、商品理解の深化、地域との関係強化など、企業にも固有の狙いがある。

連携を継続させるためには、相手にも意味のある構造でなければならない。

そのため、CEOとして常に意識していたのは、相手の目的を教育設計の中にどう位置付けるかであった。

生徒との対話時間を設けること、取り組みを取材につなげること、企業名が露出する機会をつくること、企業の商品を授業の題材として扱うこと、アンケート結果を整理してフィードバックすること。これらはすべて、相手にとっての価値を構造に組み込む試みであった。

相手の目的を考えることは譲歩ではない。長期的に見れば、それは学校にとっても利益となる。双方に価値が循環する構造が、連携の基盤となる。

2. 手段レベルでの一致

学校と企業の目的は本質的に異なる。

学校は生徒の成長や学習機会の拡張を目的とする。

企業は事業価値や将来の人材接点、売上向上といった成果を目的とする。

目的そのものを一致させることは現実的ではない。

重要なのは、異なる目的を持ちながらも、同じ行為が双方の目的を満たす状態をつくることである。

外部講師による出張授業は、学校にとっては高度な技能や実務知見を学ぶ機会である。一方で企業にとっては、自社の技術や考え方を将来世代に伝える場であり、将来的な人材接点となる。両者の目的は異なるが、「授業を実施する」という同じ行為がそれぞれの目的を同時に満たしている。

百貨店での販売も同様である。学校にとっては価格設定や販売戦略、接客を含む実践的な学びの場である。一方で百貨店にとっては、高校生による売り場の活性化や来店動機の創出、ついで買いによる売上向上につながる。

目的は異なる。しかし、「店頭で販売する」という行為は双方の目的を同時に実現する。

一致は理念ではなく、具体的な行為の設計によって生まれる。

3. 現場レベルの協働

連携は合意だけでは成立しない。現場レベルでの協働の質が問われる。

外部講師は専門分野のプロであり、教員は教育のプロである。役割は異なる。専門性を尊重し合い、共に教育をつくる姿勢が重要であった。

そのために三つのプロセスを重視した。

第一に事前共有。授業の目的や生徒の実態を共有し、外部講師の内容を教育設計の中に位置付けた。

第二に目的のすり合わせ。外部講師が伝えたいことと学校の育成目標の接点を探った。

第三に実施後のフィードバック。アンケートや成果物を整理し、個人情報を除いた形で共有した。外部講師にとっても学習効果が可視化される構造を整えた。

単発の協力ではなく、協働の質を高める関係を築いた。

4. 自走に向けて

自走段階においては、学校がコーディネータとして機能することが求められる。

外部の力は不可欠である。しかし、外部任せにしてはならない。学校自身が目的を言語化し、相手の目的を理解し、状況に応じて適切に判断する力を持ち続ける必要がある。

外部連携の本質は依存ではない。互いの専門性を尊重しながら、異なる目的を持つ主体同士が、行為レベルで価値を共有できる構造をつくり続けることである。

【V. 自走とは何か — 判断し続ける組織へ】

自走とは、単にこれまでの取り組みを継続することではない。

同じ形を守り続けることでもない。

むしろ、単なる継続にとどまらないように意識し続けることが重要である。

本章で教育構造を整理し、判断軸を言語化したのは、形を固定するためではない。自走を可能にするための土台を整えるためである。

構造化は、決して変更してはならないものではない。三つの判断軸も、絶対的な正解として示したものではない。事業ビジョンや教育的価値の捉え方は、地域や社会の状況によって変化する。

状況に応じて問い直し、必要であれば更新していくこと。それ自体が自走である。

重要なのは、判断を自ら行っているかどうかである。

誰かの力を借りてはならないということではない。外部との協働は、これからも不可欠である。自分たちだけでやらなければならないという考えは、かえって視野を狭める。

しかし、力を借りることと、判断まで委ねることは異なる。

相手の提案をそのまま受け入れるのではなく、立ち止まり、照らし合わせ、設計し直す。その主体性を失わないことが、自走を支える。

三年間で積み重ねてきたのは、個別の授業やプロジェクトではない。判断し、設計し、修正するための枠組みである。

この枠組みを状況に応じて使い、問い直し、必要であれば変えていくこと。その営みの中にこそ、自走の本質がある。

【結びに — 終わりではなく、ここから始まる】

本事業の推進にあたり、多大なるご支援・ご協力をいただいた越生町をはじめ、産業実務家教員の皆様、各種連携先である企業・大学・専門学校の皆様、そして運営委員会・事業推進委員会のメンバーの皆様に、心より感謝申し上げます。

また、日々生徒と向き合い、実践と挑戦を重ねてきた教職員の尽力なくして、本事業はここまで積み重ねることはできなかった。

多くの関係者の理解と協働があっこそ、本事業は前進することができたのである。

指定期間は終了する。しかし、これは終わりではない。本当の意味でのスタートである。

専門性を武器に実践する学びと、「本番・競争・振り返り」の循環が、今後も自律的に展開され、日本の教育の未来に寄与することを願っている。

問い続ける限り、教育は止まらない。

設計し続ける限り、挑戦は終わらない。

本事業が残したのは、答えではなく、問い続けるための構造である。

ここからが、本当のスタートである。

文部科学省指定

マイスター・ハイスクール（次世代地域産業人材育成刷新事業）

令和7年度成果報告書（3年次）

令和8年3月 発行

編集・発行 清和学園高等学校

〒350-0417 埼玉県入間郡越生町上野東 1-3-2

電話 049-292-2017 FAX049-292-2510